

第12回 高大連携教育フォーラム

# 高大接続と学力形成

- 達成度テスト(仮称)について考える -

報告集

日時 2014年12月5日(金)

会場 キャンパスプラザ京都

主催 京都高大連携研究協議会

京都府教育委員会

京都市教育委員会

京都府私立中学高等学校連合会

京都商工会議所

公益財団法人大学コンソーシアム京都

# 第1部

## 目次

# 第2部

### 1. 基調報告 … 2

#### 中村博幸

京都文教大学 臨床心理学部 教授  
大学コンソーシアム京都 高大連携推進室  
コーディネーター

### 2. 特別講演 … 4

#### 「大学入試の日本的風土は変えられるか -達成度テスト(仮称)を考える-」

#### 荒井克弘

独立行政法人 大学入試センター 副所長

### 3. 実践事例紹介

#### 1 「大阪府教育センター附属高等学校 『探究ナビ』の実践 -新たな「学び」が、ここから始まります。-」

#### 恩知理加

大阪府教育センター附属高等学校 教頭

#### 山元 聡

大阪府教育センター附属高等学校 首席兼探究科主任 …12

#### 2 「高経大+高経附『高大コラボゼミ』 -双方向的高大連携の試み-」

#### 矢野修一

高崎経済大学 教授  
高崎経済大学附属高等学校 顧問 …14

#### 3 「京都工芸繊維大学『ダビンチ入試』 -テストで何をどのように測るか?-」

#### 内村 浩

京都工芸繊維大学 アドミッションセンター 教授  
大学コンソーシアム京都 高大連携推進室 …16

### 4. ディスカッション …18

#### 棕本 洋/コーディネーター

立命館大学 理工学部 講師  
大学コンソーシアム京都 高大連携推進室  
アドバイザー

#### 荒井克弘・恩知理加・山元 聡

矢野修一・内村 浩 /登壇者

### 第1分科会 <表現技法> …30

#### 「授業リフレクションとしてのラベルワークの実践」

#### 中地譲治

慶応義塾志木高等学校 教諭

#### 長谷川 伸

関西大学 商学部 准教授

#### 筒井洋一/コーディネーター

京都精華大学 人文学部 教授  
大学コンソーシアム京都 高大連携推進室 コーディネーター

### 第2分科会 <数学> …36

#### 「高大連携による数学的活動を取り入れた 教材の紹介と実践報告」

#### 松田和真

京都府立南陽高等学校 教諭

#### 深尾武史

京都教育大学 教育学部 准教授

#### 遠山秀史/コーディネーター

京都府教育庁 指導部 高校教育課 指導主事

### 第3分科会 <英語> …40

#### 「発信力を重視した 英語コミュニケーション能力の育成を目指した 指導と評価について」

#### 國松裕子

京都市立西京高等学校 教諭

#### 泉 恵美子

京都教育大学 教育学部 教授

#### 太山陽子/コーディネーター

京都市教育委員会 指導部 学校指導課 指導主事

### 第4分科会 <理科> …44

#### 「高大連携による 龍谷大学付属平安高等学校における 理科の取り組み」

#### 中島和也

龍谷大学付属平安高等学校 教諭

#### 藤原 学

龍谷大学理工学部 教授

#### 林 久夫/コーディネーター

龍谷大学 理工学部 教授  
龍谷大学 高大連携推進室長

### アンケート結果 …48

第1部

# 1. 基調報告

---

## 中村博幸

京都文教大学 臨床心理学部 教授  
大学コンソーシアム京都 高大連携推進室  
コーディネーター

## 1.基調報告

**報告者** 中村 博幸 氏

(京都文教大学 臨床心理学部 教授

/公益財団法人大学コンソーシアム京都 高大連携推進室 コーディネーター)

**概要** 報告時間:10分

京都高大連携研究協議会の現状説明と、本日のテーマについての紹介及び本日のフォーラムの概略の説明がなされた。

最初の中央教育審議会(以下「中教審」という)の答申では、「達成度テスト(仮称)」は「基礎レベル」と「発展レベル」という名称で審議がなされていたが、10月24日に出た中間報告では、「高等学校基礎学力テスト(仮称)」「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」に変わっており、前者は高等学校での学力保証、後者は大学で必要とされる学力を測るものとされている。

第1部の特別講演では、新しいテストを運営していく側として、大学入試センターの荒井副所長からご講演いただき、実践事例紹介では、3校から高大連携の実践例をご紹介いただき、最後に、特別講演と実践事例を踏まえたディスカッションを行う。



■中村先生による基調報告

第2部では、従来と同様に「表現技法」「数学」「英語」「理科」の4分科会に分かれ、各教科での実践例とその成果を発表いただき、参加者との議論を深める形で実施する。

### 【参考】 高大連携教育フォーラム テーマの変遷

- 2003年度 第1回 「生徒が学生に成長するために」
- 2004年度 第2回 「学びの接続を実現するために」
- 2005年度 第3回 「新局面を迎えた高大連携」
- 2006年度 第4回 「学力構造の変化と高大連携の可能性-新局面を迎えた高大連携Ⅱ-」
- 2007年度 第5回 「高大連携のあり方を検証する」
- 2008年度 第6回 「高校新教育課程と接続教育の課題」
- 2009年度 第7回 「高大連携から接続教育への視座～高大で考える『生きる力』の育成～」
- 2010年度 第8回 「新しい時代に求められる能力をどう育成するか～高大接続テストの持つ意味～」
- 2011年度 第9回 「新学習指導要領が求める学力とは」
- 2012年度 第10回 「これからの時代に求められる学力・能力とは?-教育の目標を明確化するために-」
- 2013年度 第11回 「新しい時代を拓く高大接続の『学び』とは-京都からの発信-」
- 2014年度 第12回 「高大接続と学力形成-達成度テスト(仮称)について考える-」

第1部

## 2. 特別講演

---

「大学入試の日本的風土は変えられるか  
-達成度テスト(仮称)を考える-」

**荒井克弘**

独立行政法人 大学入試センター 副所長

## 2.特別講演

**講演者** 荒井 克弘 氏

(独立行政法人大学入試センター 副所長)

**テーマ** 「大学入試の日本的風土は変えられるか ―達成度テスト(仮称)を考える―」

**概要** 講演時間:50分

新たに導入されようとしている「高等学校基礎学力テスト(仮称)」と「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」の背景や課題について、以下の4つの観点から考察がなされた。

### (1)今日の大学入試

中教審や教育再生実行会議の提案、答申案が出て、行政的には一応の節目にきているが、改めて、我々が直面している大学入試の課題は何であるかを確認したい。18歳人口は、1992年に205万人であったものが12年には120万人を割っているのはご存じのとおりである。1980年代の頃は年齢人口の減少により、将来、多数の大学が潰れ、大量の教職員が失業すると危惧されたが、結果的には1996年頃まで学生数は増え続け、短大、学部、大学院の学生総数は300万人を突破した。その後、今日までほとんど規模は変わっていない。つまり、年齢人口は4割ほど減少したが、高等教育の事業規模はそのまま維持されている。

この事実は、各大学の経営努力の賜であるが、他方では、進学障壁を低下させて学生確保に努めてきた結果であることも否定できない。50年前の1960年の大学・短大進学率は10.3%であった。それが2010年には56.8%に増加した。専修学校の専門課程(専門学校)を加えると、その割合は8割に膨らむ。かつて文部科学省が行った授業理解度の調査では、授業を理解できると回答した児童・生徒の割合は小学校で7割、中学校で5割、高等学校で3割であった。授業を理解できる高等学校生が3割しかいないにも関わらず、6割が大学・短期大学に進学し、さらに2割が専門学校に進む。教育課程を仮に積木に例えれば、高等学校教育のうえに大学・短大教育をさらに重ねれば積み木は崩れる。入試をはじめ教育システムの見直しが必要となった理由はここにある。

見直しを求められているのは威信の高い大学をめざす者たちというよりも、ボリュームゾーン(大衆化した大学、中堅学力層)にいる学力層の教育である。彼らの進学をどのように支援し実現していくのか、どのような大学、学部に進学することが本人の希望・能力に適っているのか、入学後の教育的付加価値を高めるにはどうしたらよいか、この20年余り、高大接続に問われてきた課題である。

M.Trowは高等教育の拡大にともなってエリート型、マス型、ユニバーサル型へと、高等教育の類型が変わっていくことを論じたが、この類型に応じて入学者選抜の原理も変わっていく。高等教育の発展した今日のような状況で重要なことは、エリート型～マス型～ユニバーサル型とい

う複数の高等教育類型が同時代に併存することである。

エリート型の大学では高度な学術に基づく教育・研究が活動の中心となろうが、ユニバーサル型の大学では、職業に結びつく知識や技能の提供、修得が主要な目的となる。教育的付加価値の実現、という観点からすれば、いずれも教育の「結果の平等」をめざしていると言えないことはない。現在、私立大学の約半数、国公立大学の約2割の学生が推薦入試、AO入試で入学していくが、こうした高等教育の類型に応じた入学者選抜、高等教育がどれだけ努力されているだろうか。それが問われている。一般入試と同様、推薦入試、AO入試にも多大の努力が払われていることは承知しているが、なかには、学生確保のデコレーションにAO入試が使われているところもないとはいえない。このような高大接続の事情を前提に、教育再生実行会議や中教審高大接続特別部会の審議が進められなければいけないし、またその提言、答申についてもその観点から吟味されるべきだろう。しかし大切なことは、改革の主体はあくまでも高等学校や大学・短大であるという認識である。

## (2) 高大接続と共通試験

諸外国の共通試験の状況を見ながら、日本の共通試験のこれまでとこれからを検討してみる。ここでは、ドイツ、イギリス、アメリカ、フランスを取り上げる。いずれの国も進学率は上昇しており、試験の性格も微妙に変化してきた。ドイツ、フランスは資格試験の国であり、中等教育修了資格が同時に大学入学資格を兼ねている。そうした資格試験制度が機能するのは、大学制度が格差のない均等な構造をもっているからである。一方、アメリカとイギリスは、資格試験ではなく、個別の大学が選抜を行う。大学には階層構造があり、入学者選抜は競争的になる。両国ともに共通試験が行われているが、アメリカではSAT(ACTは教科型)という適性試験型の試験が採用されている。それはアメリカが地方分権的な教育行政の国であり、州や郡、また地域ごとにカリキュラムが異なるからである。日本で実施しているような標準教育課程にもとづく学力テスト(達成度テスト)は実施できない。因みに、ACTは教科型のテストだが、基礎学力を確認することを目的とする難度の低い試験である。また、イギリスは教科・科目型のアチーブメント型試験を実施している。科目別に資格試験的な扱いをすところがある。ケンブリッジ大学、オックスフォード大学を頂点とする階層的な大学制度をもっていることも特徴である。

つまり、それぞれの国の共通テストは、各々の中等教育制度と大学制度の対応関係からその形態が決まっている。

さて、日本は、階層的な大学構造を持っている国でありながら、高等学校は全国的に徹底した標準教育課程をもち、さらに高等学校も一次元的な階層構造をもっているという特徴がある。イギリスも1988年の教育改革によりナショナルカリキュラムを導入したが、伝統的には多様性に



富む中等教育制度をもっている。ひとつ、結論めいたことをいうと、日本の大学入学者選抜に「共通試験」は必要なのかと問われれば、「NO」だと答えるべきだろう。センター試験も新テストも必要ない。各大学が、学習指導要領、教科書に準じて試験問題を出題する限り、入学試験はすべて共通試験になるのである。

ところが、日本では、戦後だけでも4つの共通試験を導入し、実施してきた。敗戦直後に導入された「進学適性検査」、1960年代の「能研テスト」、1980年代の「共通第1次学力試験」、そして「大学入試センター試験」である。60年代の能研テストがほとんど使われることなく廃止されたが、進学適性検査は、敗戦後の教育的混乱の中で、GHQの勧告にしたがって行われたという説もある。他方で大学進学への開放政策を支えるという大義名分もあった。能研テストは、国民所得倍増計画という経済計画における、マンパワー政策を担う役割があった。行政主導であり、経済に従属した入試改革との批判は大学に根強かった。共通第1次学力試験は大学主導で進められた。高等学校での受験シフトの是正、難問奇問の解消、内申書重視がスローガンになった。共通試験の目的は内申書の基準化にあったが、結果的には共通1次試験そのものを使う制度になった。しかし、共通試験の実施は大学の一次元的な序列化を促し、受験者の輪切りをさらに強めることとなった。大学入試センター試験への衣替えは明らかに共通1次試験による受験競争の加熱を沈静化させることにあった。共通試験は入学者選抜の脇に回り、個別大学入試に主眼を置いた改革となった。センター試験のアラカルト利用を普及させ、個別大学入試の多様化を鼓舞したのも、そのためであった。

今回の入試改革は、「センター試験の廃止」で口火が切られた。しかし、当初は高等学校教育の質保証、高等学校、入試、大学教育の三位一体改革がスローガンであった。因みに、センター試験の廃止の理由は、「志願者が増えすぎ」、「出題科目が過剰」、「試験実施が複雑化」であった。

志願者の増加は、大学進学者の増加による。55万人の志願者数は確かに共通1次試験の頃の2倍にあたり、大学、短大志願者数の75%にのぼる。出題科目数は、29科目である。センター試験志願者はこの中から最大8科目を選び、2日間で受験する。しかし、大学、高校教育の多様化を考慮すれば、30科目でもまだ足りない、という見方もある。試験実施の複雑さについては、公平性と多様性という2つの相反する原理を両立させるとすれば、現状の複雑さは避けられない。シンプルにするには試験の日数を増やし、時間をかけることであろう。

センター試験は推薦・AO入試に利用し難いとの指摘もあるが、この種の改善を図るには推薦入試・AO入試を「秋入試」に変えることである。早めに学生確保に走りたい大学の事情も分からないではないが、一般入試の3月が終えてから、これらの入試を行うことはその趣旨に適っている。

### (3)教育再生実行会議・中教審高大接続特別部会の審議経過

平成25年10月に提出された教育再生実行会議の第4次提言では、2種類の達成度テスト(基礎レベル・発展レベル)の導入が提案された。特記すべきはいずれも「複数回実施」と「段階別表示の成績提供」とされた点である。しかし、この種の提案の実現は、残念ながら不可能である。測定理論を十分に理解しないままに提案に結びつけた結果、飛躍した内容となった。複数回実施についていえば、試験問題の等質化、得点の標準化ができなければ、試験を複数回しても成績の比較はできない。また、項目反応理論を導入しようとするれば、項目バンクの構築が不可欠である。このデータバンクには1科目に少なくとも2~3万問のストックが必要であり、それらの項目はすべて事前調査による統計的なパラメーターの推定が必要である。

「段階別表示」については、誤差の問題が考慮されず、区分境界の問題は残ったままである。得点誤差を超えた段階別表示は情報量を目減りさせる結果となり、複数回実施の間の学力の伸びの問題も測定論の枠を超えている。また多面的と称する他の指標との総合化の提案も具体的な処理の見通しは見えないままである。

中教審高大接続特別部会の答申案は、教育再生実行会議の議論を踏襲し、2つのテストに高等学校基礎学力テスト(仮称)と大学入学希望者学力評価テスト(仮称)という名前を付けた。また、個別大学での評価では多面的評価を重視した個別選抜を行うとしており、改革の基調は再生実行会議から少しも具体化していない。面妖なのは、個別大学の試験では、学力以外のものを多面的に評価することにするから、一般入試、推薦入試、AO入試の区分を撤廃するとしている点である。不可解さはむしろ再生実行会議以上に増した。

高等学校基礎学力テスト(仮称)は、高難度から低難度の問題まで広範囲の難易度を測るといふ。CAT(Computer Adaptive Test)が導入できるならいざ知らず、このような提案は試験の妥当性と信頼性を低めるばかりである。また、多肢選択式を原則としつつ、記述式の導入をめざすとなっているが、全高等学校生がもし受験すれば120万人となる。その数の記述式問題をどう採点するのか。記述式問題は、採点の作業量も膨大だが、それ以上に採点の公平性の担保は



■荒井先生による特別講演

きわめて難しい。高2、高3で実施し、各学校の生徒に段階別表示の成績提供を行うというが、それをどのように高等学校教育の向上に結びつけるのか一向に理解できない。また、英語については民間の資格・検定試験の活用を奨励しているが、既出の資格検定試験が高等学校英語の学習指導要領に沿って作られている保証はない。

残念ながら、中教審高大接続特別部会の審議の中では、学力調査と入学試験の区別さえついていない。教育再生実行会議では、技術的背景が欠落しているものの一応の辻褄は合っていた。中教審の答申案にいたっては支離滅裂に

なったとしかいいようがない。

大学入学希望者学力評価テスト(仮称)は、大学入試センター試験に替わるものとされているが、ここで強調されているのは、教科・科目型の枠を超えることであり、将来は「合教科・科目型」「総合型」のみにするという提案になっている。教科・科目の枠を取り払えば、自由な出題、活用力を測る出題ができると考えている点にまず誤解がある。「合教科・科目型」「総合型」の試験にすれば、むしろ妥当性、信頼性の低下を招き、十分な思考力、活用力を測ることはさらに難しくなる。

- 教科・科目は、高等学校教育と大学教育の間で基軸通貨としての役割を担っており、それを目標として、高等学校は教育をし、大学はそれを履修・習得しているという前提のもとで募集、判定がなってきた。「合教科・科目型」「総合型」では、情報の共有ができず、伝達の形式は崩れてしまう。
- 教科・科目は、それぞれの学問・研究分野を背景に持っていることで、次々とオリジナルな問題を作成してきた。単純に合教科・科目といわれても、どういった枠のなかで問題を作成されるのか検討もつかず、何より受験者に過大な学習負担を強いることになる。
- 形式的に合教科・科目型試験を作ったとして、試験時間、問題数が増えなければ、試験の妥当性、信頼性が低下する(因子分析をすると、結局、元の教科・科目の学力因子に回帰することはこれまでの研究が示すところでもある。)
- また総合型の問題とすると、資料の読解に時間がかかり、高度な問題にすれば、正解が一意に定まらない場合が増えていく。
- 「合教科・科目型」「総合型」の問題は、背景に学問的な体系性を持たないために、パターン化への収束が早く、試験問題の劣化が早いという欠陥もある。

思考力、活用力について中教審で審議されたことは、大学入試センターではすでに検討してきたことである。教育内容の構造からみても、高等学校教育と大学教育は、同心軸の上に積み上げられるのではなく、それぞれに独自の目標があり、それらがクロスする関係にある。センター試験の目的が「大学進学を志願する者の、高等学校教育における基礎的達成度を判定する」となっているのは、高等学校の学習指導要領に準拠し、教科書に記載されている事項を学習範囲として尊重するという意味である。センター試験の問題作成委員はすべて大学教員であり、センター試験は高等学校教育の枠組みに縛られてはいるが、そのなかでどこまで、大学の求める知識、能力を出題できるか、そのぎりぎりのところで作成されている。その意味ではセンター試験の問題自体が大学から高等学校に向けた接続のメディアである。

中教審の答申がそのまま実行に移されるとなると、中堅以下の生徒の学力がますます低下する恐れがある。高等学校基礎学力テスト(仮称)をどの時期に実施するかにもよるが、仮に高3で実施するのであれば、何の意味もない。実施するのであれば、高等学校教育のスタートでなけ

れば有効な役割を果たすことは難しい。義務教育を習得できないままに進学してくる生徒の対応に高等学校が苦勞していることは承知している。まず、教育のスタートで準備学力の内容を確かめなければ、それを強行したところで何のための質保証になるのか、不明である。生徒たちの学力診断もなく、1回か2回の共通試験をしたら、高等学校教育の質は保証できるという発想は到底理解に苦しむ。中学、高等学校の接続を担保することなく、高等学校教育の質保証はできない。高等学校基礎学力テストは(仮称)は、今のままでいくと「出口調査」のようなものにしかかなり得ず、高等学校教育の空洞化は避けがたい。

我々が直面しているのは、マス・ユニバーサル型高等教育における大学入試改革をどのようにするかであり、実施すべきことは、選抜のためでなく教育のためのテストである。従来のような High-Stakes (一か八か)ではなく、Low-Stakes(日常的な生活の中に溶け込んだもの)な試験に変えていくことである。つまり、能力主義選抜を目標とするものではなくて、教育診断を目安に、学習の里程標が見える試験に変えていくことが、大学入試改革の課題だと認識している。このことが今回の入試改革の中で、どれほど正面から論じられたのか、疑わしい。

#### (4)未来型の「大学入試」

「試験」「学校」「選抜」という3つのファクターは、我々が見ている大学・学校教育において不可分なものとなっている。だが、「試験の時代」(天野郁夫,1986)によれば、ヨーロッパで「試験」と「学校」が結びついたのは16世紀であり、「学校」と「選抜」、あるいは「試験」と「選抜」が結びついたのは封建的な身分制が崩壊し始めた、18世紀である。競争試験は近代社会に移行する際の「社会改革の装置」として登場し、18～19世紀に3つのファクターが結びついた。そう考えてみると、われわれを拘束している仕組みも、たかだか200年のことである。今後の大学入試のあり方を考えるには、そろそろ、この呪縛から解かれて自由になっても良い時期だろうと思う。この点については、試験機関と選抜主体とをはっきりと分けて、独自の調整機関をつくっていったらどうかと考えている。(講演時間が限られているので、補足はディスカッションで行う)

+++++



第1部

## 3. 実践事例紹介 - 1

「大阪府教育センター附属高等学校  
『探究ナビ』の実践  
-新たな「学び」が、ここから始まります。-」

### 恩知理加

大阪府教育センター附属高等学校 教頭

### 山元 聡

大阪府教育センター附属高等学校  
首席兼探究科主任

### 3.実践事例紹介-1(高等学校での先進事例)

**講演者** 恩知 理加 氏  
(大阪府教育センター附属高等学校 教頭)  
山元 聡 氏  
(大阪府教育センター附属高等学校 首席兼探究科主任)

**テーマ** 「大阪府教育センター附属高等学校『探究ナビ』の実践—新たな『学び』がここから始まります。—」

**概要** 講演時間:30分

本校は、「大阪の府立高校のさらなる特色づくり推進事業」の一環で、平成23年度からスタートした4年目の学校である。50年の歴史がある大和川高等学校を受け継ぎ、大阪府教育センターと連携したナビゲーションスクールとして、「生徒中心の教育」アクティブラーニングを導入している。また、教育センターの指導主事が週に一



■大阪府教育センター附属高等学校 恩知先生

度、必修教科の授業見学を行い、指導助言をもらい授業改善に役立てている。特色ある取組として、数学科のNHKの番組を利用した反転学習や理科の大阪市内にある博物館、科学館に無料で見学できる「キャンパスメンバーズ制度」を活用した授業を行っている。3年間を通じた「探究ナビ」の授業では、USJの協力を得た商品開発にも取り組むなど、一方通行の講義型ではなく、生徒が主体的な活動を通じて学習していくスタイルをとっている。

「探究ナビⅠ」では、コミュニケーション能力や「人とつながる力」を育成し、「探究ナビⅡ」では、自然や社会とのかかわりへの関心を高め、「社会とつながる力」を育成する。最後に「探究ナビⅢ」では、社会の一員として、主体的・創造的に課題を解決し、「未来を拓く力」を育成する。コミュニケーションの基本である「聴くこと」「話すこと」に注目し、まずは自己紹介の練習をする。そのときに、直観ではなく伝えたいことを整理してから話すようする。次に、他の人の自己紹介を聴き、その人を他の人に紹介し、聴く力、説明する力を養う。他の人の話を聴くと、お互いに光る部分を



を発見し、それについて「教えて」と言うようになる。「教えて」と言われた者は自分に自信がつき、探究のもっとも大きな力になる。これにより、「発見」「探究」「感動」「自信」のサイクルができ、円滑な人間関係が構築されていく。人間関係が出来上がった上でコンセンサス実習を行うと、事前に自分の考えをまとめて他者に伝える力を身に付けているので、スムーズに進められるよ

うになる。演劇的手法による表現方法や、iPadでの発表やインタビュー手法など、研究に必要な様々なスキルを育成し、最終的にはチームで課題研究をし、発表会を楽しんでいる。

第1部

## 3. 実践事例紹介 - 2

「高経大＋高経附『高大コラボゼミ』  
-双方向的高大連携の試み-」

矢野修一

高崎経済大学 教授

高崎経済大学附属高等学校 顧問

### 3.実践事例紹介-2(高等学校と大学の連携事例)

**講演者** 矢野 修一 氏

(高崎経済大学 教授/高崎経済大学附属高校 顧問)

**テーマ** 「高経大+高経附『高大コラボゼミ』－双方向的高大連携の試み」

**概要** 講演時間:30分

2010年度から実施している高大コラボゼミは、高経大・高経附の教員同士、学生・生徒が協力しながら統一的な研究テーマを掲げ、ゼミナール形式の少人数グループ学習を進めるプログラムであり、年齢の違う者同士が教室の一方通行的座学を離れ、専門的知識、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力を高め、大学・高校それぞれの教育効果を向上させるとともに、進路・キャリア意識の涵養を図ることを目的としている。実施時間帯は、高経附の「総合学習」の時間を充て、会場は高経大を利用しており、普段の教室と異質な雰囲気を感じさせることが、高校生の意識を高め、学びへいざなう要素となっている。

まず、高経附3年生約40名と高経大矢野ゼミナール3年生約15名を6グループに分け、「日本企業の海外戦略」を共通テーマとして研究させる。その研究成果について、レポート作成やプレゼンテーションにより発表する必要があるため、高校生は、議論に必要なデータや適切な資料を探す方法や、議論の仕方・伝え方の工夫について学習し、大学生は、高校生に教えるために、より広くかつより深く理解しようと努力するようになり、そのことが、より深く学ぶことへとつながっており、相乗効果を生んでいる。また、発表・討論を重ねたうえで、企業の東京本社を訪問し、インタビューを行うことで、高校生は経済の最前線で働く企業人にロールモデルを見出し、高校での「学び」の意味を再確認し主体的に進路選択をするようになる。大学生にとっては結果的に就活に向けた予行演習にもなっている。

この高大コラボゼミは、生徒及び学生から「自己を肯定的に評価し、未知のテーマであっても、それに挑戦してみようという気持ちを起こさせる力」としての「自信力」

(河地和子『自信力が学生を変える』平凡社新書、2005年)を引き出し、育成している。具体的なテーマに主体的に関わり、メンバーと協力しながら小さな成功ないしは失敗体験を積み上げていくことが、非常に有効であると考えられる。また、高大の教職員、企業人、企業OB等、「良き大人たち」が連携・協力・支援し、見守っていることも、生徒・学生を育てる重要な要素となっている。(詳しくは、高経大産業研究所編『高大連携と能力形成』日本経済評論社、2013年 参照)



■高崎経済大学 矢野先生

第1部

## 3. 実践事例紹介 - 3

---

「京都工芸繊維大学『ダビンチ入試』  
-テストで何をどのように測るか?-」

**内村 浩**

京都工芸繊維大学 アドミッションセンター 教授  
大学コンソーシアム京都 高大連携推進室長

3-3

実践事例紹介

### 3.実践事例紹介-3(大学での先進事例)

**講演者** 内村 浩 氏

(京都工芸繊維大学 アドミッションセンター 教授

/公益財団法人大学コンソーシアム京都 高大連携推進室長)

**テーマ** 「京都工芸繊維大学『ダビンチ入試』ーテストで何をどのように測るか?ー」

**概要** 講演時間:30分

中教審が提示した大学入試改革案は、多面的・総合的な評価に基づく大学入試を目指したものである。しかし、その具現化は容易ではない。本学ではすでに13年前から、多面的・総合的な評価を取り入れたAO入試である「ダビンチ入試」を実践し、成果を挙げている。一般に、AO入試の学生はドロップアウトが多いイメージがあるが、ダビンチ入試はそうではない。ダビンチ入試では、ドロップアウト傾向の学生の出現率は一般入試の半分程度しかない。また、目的意識が明確であり、学生委員会やクラブ活動などでリーダーシップを発揮している学生が多い。

ダビンチ入試では、本人と高校から提出された書類をもとにポートフォリオ評価を行うとともに、スクーリングによる試験で、大学の学びのスタイルでどれだけ力を発揮できるかをみる。まず、全学共通で実施する一次スクーリングでは、大学で模擬講義を聴いた後、筆記試験により、講義内容を理解して活用する力や、講義に関連した英文読解、理科・数学の基礎学力などを測っている。また、小論文では、与えられた題材に関連した自己の経験や将来の展望を分析的に論述させることにより、読解力や文章表現力だけでなく自己分析力や目的意識なども評価する。次に、学科別の最終スクーリングでは、グループディスカッションやプレゼンテーションなど、コミュニケーション力をも測るようなユニークな試験が工夫されている。合格者には充実した入学前教育を提供し、さらに個別学習相談会で先輩学生や教員がマンツーマンで指導する。ダビンチ入試は「たとえ不合格でも意味のある入試」となっており、受験生の感想からは「試験が楽しかった」という意外な声が聞かれる。

ダビンチ入試は、毎年入試研究会を開催して高校と大学の教員が意見交流しながら、少しずつ改善を重ねてきた。このたびの入試制度改革についても、生徒・学生の成長を中心に据え、高校と大学の教育改善とあわせて、総合的に検討する必要がある。そのためにも高大連携は不可欠である。高校までに習得した基礎知識に加えて、理解力、活用力、表現力、コミュニケーション力などの学力を測定するという意味では、大学入試が「合教科型」「総合型」へ移行することは望ましい。しかし、基礎・基本を軽視することのないよう、バランスをどうとっていくか、具体的にどう測定するかなど、まだまだ検討が必要である。



■京都工芸繊維大学 内村先生

第1部

## 4. ディスカッション

---

〈コーディネーター〉

**棕本 洋**

立命館大学 理工学部 講師  
大学コンソーシアム京都 高大連携推進室  
アドバイザー

〈登壇者〉

**荒井克弘**

**恩知理加**

**山元 聡**

**矢野修一**

**内村 浩**

#### 4.ディスカッション

##### 登壇者

荒井 克弘 氏

(独立行政法人大学入試センター 副所長)

恩知 理加 氏

(大阪府教育センター附属高等学校 教頭)

山元 聡 氏

(大阪府教育センター附属高等学校 首席兼探究科主任)

矢野 修一 氏

(高崎経済大学 教授/高崎経済大学附属高等学校 顧問)

内村 浩 氏

(京都工芸繊維大学 アドミッションセンター 教授

/公益財団法人大学コンソーシアム京都 高大連携推進室長)

##### コーディネーター

椋本 洋 氏

(立命館大学理工学部 講師

/公益財団法人大学コンソーシアム京都 高大連携推進室 アドバイザー)

##### 概要

実施時間:90分

椋本洋先生をコーディネーター、特別講演、実践事例紹介の登壇者をパネリストとしてディスカッションを行った。参加者からのコメントペーパーをもとに、3校の実践事例や達成度テスト(仮称)の技術的な問題、理念的な問題、また、未来型の大学入試等を論点として、会場の参加者も交えて活発な議論が行われた。

社会の変化による能力観の転換は、これまでの「知識習得型の」高等学校教育に大きな波紋を呼び起こしている。具体的には、高等学校の新学習指導要領の特徴である「活用・探究型の学習」について新しい教育が胎動し始めている。次に、そうした学力が要求される入試などへの影響について考える。



■コーディネーター 立命館大学 椋本先生

## ① 3校の実践事例について

### 【大阪府教育センター附属高等学校】

#### ◆探究科と教科の連携は怎么样了

(恩知) 各教科の教員が、「探究ナビ」の授業を見学したり、実際に関わったりすることで、自身の授業でもその要素を取り入れ、生徒同士のコミュニケーションを図る活動を、比較的容易に取り込むことができている。また、「探究ナビ」の授業のおかげで、教員と生徒との関係がよく、活気がある。教員の質問によく反応し、ペアワークやグループワークもスムーズに実施できている。

#### ◆生徒一人ひとりの個の意思決定を集団としての意思決定(社会的合意・コンセンサス)へリフレクティブさせる取組み・仕組みについて

(山元) グループ内で意見がまとまらないときは、なぜまとまらないのかを考えさせ、それでもまとまらないときは、それ以上強引に合意させることはしない。「これだけが正解」というのは要求しないが、「それは絶対違う」ということは、はっきり指摘するようにしている。ただ、コンセンサス実習授業には正解が必ず一つあるため、その正解と何が違ったのかを考えさせるようにしている。答えを合わせるのではなく、何が答えかを考えるのが「探究」である。

### 【高崎経済大学・同附属高等学校】

#### ◆教科と高大コラボゼミの仕組みについて

(矢野) 高大コラボゼミは、高崎経済大学と同附属高等学校の高大連携の一つのプログラムであり、他にも高等学校の各学年で様々な高大連携が取り組まれている。高等学校の「総合学習」の時間を使って実施しており、3年1組、2年1組、1年1組が文系オナークラス(特別クラス)として総合型の実践実習を進めている。また、高等学校に「高大連携課」という組織を置いており、10名ほどの教員が張り付いて、高等学校側の指導を担当している。

### 【京都工芸繊維大学】

#### ◆ダビンチ入試を聞いてどういう感想を持ったか

(荒井) 率直に言って、大変感動した。予想もしていなかったのは「入試を受けたらとても面白かった」という言葉が受験生の口から出てきたことであり、これは大変な評価だと思う。本来は、推薦入試であれAO入試であれ、提案されたときはこういう入試をしたかったのであろうが、それを実現できるだけの教員や組織を持てなかったのだと思う。一般入試からは排除されてしまうが大変優秀な子どもたちがいて、そういう部分を伸ばしてやる、一言で言うと、「才能発見入試」だと拝聴した。大事なところは、あまり規模を大きく

しないでほしいということ。才能を持っている人はそんなに多くないし、一定規模の大学でこういう入試があるということが、他の大学でも取り入れていきっかけになるのを期待したい。ただ、入試の全般的な状況を申し上げると、そんなに才能も学力もないボリュームゾーンの人たちに、どういう形で大学進学の仕事を用意してやれるかが非常に大きな課題であり、ダビンチ入試はその大きなヒントを与えてくれるが、ポピュラーな形にはなりえないと思われる。

(内村) すべての人には才能があるが、それに磨きがかかっているかいないかだと思っている。「才能発見入試」と荒井先生におっしゃっていただいたのは大変うれしい。また、今のダビンチ入試では大人数では実施できないが、今度の新テストが活用できるのであれば、各大学が本当に測りたい試験ができるし、やり方次第だと思っている。大事なのは、各大学がどういうバランスでどういう才能を測りたいかというポリシーを持ち、新テストと各大学での個別入試をどう組み合わせようかというデザインすること。それには、専門的な知識や学習理論的な裏付けも必要となるため、大学や高等学校から専門家を集めて互いに知恵を出し合いながら、教育の改善につながるような教育改革になることを切に祈っている。

## ② 達成度テスト(仮称)の技術的・理念的な問題について

### ◆達成度テスト(仮称)について(特別講演の補足)

(荒井) 今後の入試で大事なのは、選抜型の学力試験ではなく教育診断型の学力試験である。自分の学力がどうであるか、例えば、数学の成績が良くないが数学のどこが苦手なのか、何がわからないのか、あるいは、英語は人より勝っているのか、劣っているのか等を、自分自身で見極めがつくような診断装置を持つべきだろう。「自分はこのくらいの学力を持っている」ということが自信の裏付けにもなる。「学力はこれで十分だから、他のことにチャレンジしてみよう」と思う人もいられるかもしれない。いずれにしても、これからの大学入学者選抜は、多くの人々が大学・短期大学等に進学していく時代であり、そこでの教育プロセスには適切な診断が必要である。今までのような High-Stakes (一か八か)な試験ではなく、Low-Stakes(日常的な生活の中に溶け込んだもの)な診断を考えたい。教育診断は、自分の社会の中での位置を確かめていくことであり、大学入学者選抜はその一つのプロセスにすぎない。教育再生実行会議の提言も悪くはないが、生嚙りの測定論が入り込んでいるがために、実務家にとっては解釈不能なところがある。欠けている技術論の決定的な部分は「IRT(項目反応理論)の導入」である。IRTはテスト理論にとってはかなり高度なものであり、この実施はそれなりの条件が必要になる。その環境があれば、教育再生実行会議の提案も実行できないではないし、IRTが導入できれば、異なるテスト間での得点の比較も可能となる。また、項目バンクがしっかり構

築できれば、難易度の異なる複数種類のテストを作ることも容易になるが、50万人の入試に用いる項目バンクは相当規模のものになる。(1科目につき最低 2~3 万問。現在のセンター試験の問題作成では、30 科目の小問数の総計で約 1,900 問(本試、追試))。この問題作成には 500 人の大学教員が丸1日かかりで年間 90~



■ディスカッション登壇者

100日、点検には別の大学教員がこれも総勢 200人が丸1日かかりで20日程度、同じ高等学校関係者が60人動員されている。いずれにしろ、1科目当り2~3万問を作るというのはそれほど簡単ことではない。また、この試験形態が日本的な試験風土とマッチするかどうかというのも問題である。(問題が秘匿化される、事前調査の必要、本試でのダミー問題の挿入等) 受験者をはじめ関係者がどれだけ新しい環境を受け入れられるか、また社会全体が新しい仕組みにどれだけなじめるかも、重要なポイントである。テスト項目の事前調査はテスト統計量の算出にとって必須のプロセスであるが、試験問題の漏洩、公平性の確保の観点からタブーとしてきた点である。50万人の試験であれば、事前調査も少なくとも数万人程度の標本データが必要になるであろう。テスト項目は公表されないが、統計量は次第に劣化していくため、1科目当り年間1万問くらいずつ補充していかなければいけない。そのための方法としては、本試験の中にダミーを20~25%くらい仕込んでプレテストすることも必要となる。1点を争う本試験の中に採点されないダミー問題を入れることを受験者が受け入れられるか。受験した試験問題は公表されず、もちろん自己採点はできない。成績の結果だけが通知される、そういう形式の試験に慣れることができるか、日本の試験風土と正面からぶつかることになるだろう。こうした試験に世間がどれだけ受け入れ可能なのかにかかっているともいえる。仕組みを変えることで大きなメリットが生じるが、変わるときのバリアは決して低くはない。それだけの覚悟がないと取り組めない改革である。また試験問題が公表されないことで、「試験問題」という貴重な情報メディアを失うことになる。この辺りの大変さにまったく触れずに、教育再生実行会議がある種の提言をしたり、中教審もまた同種のことをしている。公表されている実行プランのスケジュールも常識をこえたものである。仮にプランどおりに合わせるとすれば、ひどく質を落としたものにしかならない。教育再生実行会議が政治主導であったとしても、中教審は時間をかけ、より具体的なプランに修正していかなければならないはずである。責任の持てる答申を出すべきであって、できないこと、やるべきでないことを軽々に述べるべきではない。残念ながら今回の答申は政策案としてはなほだ慎重さを欠いていると言わざるを得ない。一度失った信頼と試験のクオリ

ティは回復するのにその何倍も時間と労力がかかる。壊すことは容易かもしれないが、犠牲は子どもたちが負わねばならないことになる。

### ③ 未来型の大学入試について

#### ◆未来型の大学入試について(特別講演の補足)

(荒井) そろそろ日本型学歴社会の構図から外れてみてはと申し上げたが、試験機関とは別に、志願者と大学を結ぶ仲介組織として、英国の UCAS (University & College Admissions System) のような公共性の高い国家的調整機関(学籍配分機関)をつくる必要があると考えている。もちろん、厳格な守秘義務のもとで堅牢な情報サービスに育てていかないとけないが、個人のポートフォリオを作り、大学が実施したインタビューや試験データを個別にストックし、その結果を受験者の希望する大学に提供する。大学は受験者の志望理由と提供データを検討して「うちの大学に来てみませんか」とオファーを出す。このようなシステムの下で、生徒はそこからいくつか受験する大学を決めて最終試験に挑戦することができる。これは内村先生たちのダビンチ入試のプロセスにも近いと思う。ただ、個別大学入試は、日本の場合、私学がたくさんあるので、すべてをこうした仲介機関に委ねることは難しいであろう。国公立の大学に限られるかもしれないが、個人と仲介機関、試験機関と選抜主体(大学・短期大学・その他高等教育機関)をうまくリンクさせるシステムができればよい。

(椋本) 今日は会場に中教審高大接続特別部会の委員で大谷大学教授である荒瀬克己先生\*にもお越しいただいているので、この件に関してご意見を伺いたと思います。

\*荒瀬 克己 氏

(大谷大学文学部 教授

/公益財団法人大学コンソーシアム京都高大連携推進室コーディネーター)

### ④ その他

#### ◆中教審高大接続特別部会での検討状況について

(荒瀬) 荒井先生から高大接続特別部会へのご意見をいただいたが、今後そういったご意見をふまえた上で、具体的な制度設計に向けて検討がなされていくことになろうかと思っている。今回の中教審の答申では、大学の教育改革、高等学校の教育改革、大学入試の改革という三位一体の改革を提案している。大学入試の改革は、なかなか妙案が出ない状態が続いていたのは事実であり、とりわけ教育再生実行会議が提言に向けて議論をなさっている間は、高大接続特別部会は休止状態であった。荒井先生がご説明になった内容は部会でも勉強させていただいたし、大学入試センターに来て

いただいでご教示いただいたこともあった。私を含め委員の理解はそれぞれ違うだろうし、100%専門的な理解ができているかどうかはわからないが、現行の大学入試に対する危惧と、改善に向けた思いはそれぞれに強いものがあつたと思っている。とりわけ合格することに軸足を置いたような高等学校のあり方を何とかするためには、大学入試を変えていくことが必要だ。高等学校教育は大学入試とは無関係に独立して存在するべきとは言ってもなかなかそうはいかない。高等学校教育、あるいはそこへつながっていく小学校中学校の教育に対して大きな影響を持つという日本的風土の中で、何とかしていかないといけないという議論が行われ、完成されたものが答申されるわけではないが、高等学校関係者も大学関係者も交えて具体的に大学入試をどうしていくのかという議論をスタートさせる、そして可能な限り早い段階で結論を得ようという答申であることをご理解いただければ幸いである。

内村先生のご発表にあつたダビンチ入試というのは非常に素晴らしいものだと思っている。また、九州大学でも21世紀プログラムのAO入試をしているし、京都大学でも東京大学でも入学試験の一部を変えようとしている。ただ、すべてそういった取組みは、入学者全体に対するものでは決してない。それは、人手が足りない、大変な時間がかかるといったことがあるからであり、私自身は、具体的に大学入試を変えていくときも、「1 or 0」のようにすべてを変換するべきだとは思っていない。できるところから少しずつやっていきながら、そのやっていることが様々な形で関係者にフィードバックされ、評価を受けながら徐々にではあつても変えていくことが必要かと思う。その意味では、荒井先生からご説明のあつた、項目反応理論に基づくテストのための何万問もの問題のストックを早く始めて、それが活用可能なものかという検証もしていかなければならない。

ともかく、議論を始めるとともに動いていく。入試自体の変更は高等学校の生徒、保護者、社会全体にも大変影響を及ぼすものであるので、いつの時点で大学入試を大きく変えるかは、今後の制度設計の中での議論になってくるが、議論と準備をスタートさせるのは早くしなければならない。実現できるかどうかわからないものをスタートさせるわけにはいかないというご意見もあろうかと思うが、ならば現状がずっと続くだけである。現状が続くだけで良いというのも一つのご判断だが、少なくとも中教審では現状をずっと続けるわけにはいかないだろうと言われていた。センター試験のあのレベルの問題が、どんな良問をつくっても1回しか使えず、毎年2種類ずつずっと作り続けることが本当にできるのかということも、議論の中で出ていた。大学入試センター試験のレベル・選抜性が担保されている間に、次の方法を模索しておくことが非常に重要なことであり、すべての方策が尽きたあとで考えるということは、まったく無責任なことだと思う。そういったことのスタートを、みなさんに(関係者はもちろんのこと国民レベルで)議論していただきたいということのアピールだと受け止めていただけると大変ありがたい。

(荒井) 荒瀬先生のおっしゃることもよくわかるが、センター試験の問題を無限に作り続けることは可能である。それは、人間がそれぞれの学問分野で研究を続ける限り、問題を作り続けることは可能であり、試験としては1回しか利用されないが、センター試験の問題は、高等学校においていろんな角度から分析していただくなど、教材として生きている。また、中教審の設定したスケジュール案では、5年後から基礎学力テストを始め、6年後から学力評価テストを始めとなっている。あの条件の下に改革が短期課題として設定されていることに、答申そのものがはらんでいる最大の矛盾がある。これ自体が、文部科学省当局の無責任さを示しており、そうしたスケジュールプランをつくらせた審議会の責任は大きい。

センター試験はこれからどうなるのかというご質問を会場からいただいている。今申し上げたことと重なるが、大学入試センターの根拠法令が改まり、高等学校基礎学力テスト(仮称)と大学入学希望者学力評価テスト(仮称)の両方を作題・実施することになった。先ほど申し上げた31年から高等学校基礎学力テスト(仮称)、32年から大学入学希望者学力評価テスト(仮称)を導入することになると、それまでは現行のセンター試験は続き、新しい学力評価テストに切り替わることとなる。サンプル問題はいつ公開されるのかというご質問もあるが、通常なら、どうい出題科目になるかというのを4年前には高等学校の方に提示しなくてはいけない。本来であれば、27年度には公開しないといけないスケジュールになるが、これはまず不可能かと思う。サンプル問題については、センター試験では、学習指導要領の改訂の時期については実施年度の前年というのが通常であるが、今回のように非常に大きな変化となると、2・3年前にサンプル問題を出さなければ関係者に大きな不安を与えることになる。しかし、荒瀬先生の言葉を借りれば、中教審の中核的な委員の先生方も、必ずしもこれで実施されるわけではないだろうというご判断もおありのようなので、31年32年というのがどの程度の信憑性、根拠の下で出されているのかは不明ということになる。

(荒瀬) 基礎学力テストはやろうと思えばすぐにでもできると私は思っている。小中学校の全国学力学習状況調査同様にテスト会社のものを使っても構わないという思いである。ただ、大学入学希望者学力評価テストは、個別の大学の合否に関わるのでそういったことにはならない。基礎学力テストは個人の学習意欲を引き出すとともに、高等学校における授業の改善に役立てようという目的があるので、これはすぐにでもできるし、早くにやるべきだと思う。31年32年という具体的な数字は、議論があったところの数字で、私は明記するべきでないという考えをもって発言しましたが、そうすることによって結果的にいろいろと考えていかないことが、いわば締め切りのない状態でいつまでもずらずと続くことを懸念する委員の声もあり、31年32年というのが入れられた。極めて困難であるかもしれないという思いを持っている委員が多いのではないかと。しかし、いつまでた

っても始まらないというだけは避けたい。先ほどの荒井先生のご発言で驚いたことは、大学入試センターが無限にセンター試験の問題を作れるとおっしゃったことである。おそらく、部会委員の大半は、大学入試センターが、あのレベルの試験問題をずっと作り続けることが本当に可能かということに対して非常に心配をされており、そういったこととも兼ね合わせると、早くに議論を始めなければならないという気持ちがあったことは間違いないと思っている。

(荒井) 軽々に無限という言葉を使うべきではないと思うが、仮に項目反応理論を使うとして項目バンクを作ることになっても、毎年 1 万問は作っていかなければいけないし、全教科にすると約 30 万問作る必要があるが、それに比べれば今のセンター試験は 30 科目で 860 問作ればよく、無限に作り続けることはむしろ容易な話である。

(荒瀬) 制度設計がどうなっていくかはわからないが、合教科・合科目型というのは、現行のセンター試験と同じような教科・科目では作問を続けることが大変難しいだろうという想像もあってのことだし、一方では、ボリュームゾーンの学生たちは、大学で学んで大学に残って研究し続けるのはあまりないと想定される中で、実社会で働いていくときに必要となる力と入試をどう結び付けていくのかということが大事だという議論もあり、そういったところから、教科科目型のみならず、合教科・合科目も考えてはどうかという意見が出てきたこともお伝えしておきたい。

(荒井) 私はそれが悪い循環に入ってしまった第一歩だったのではないかと思う。今の入試議論があまりにも職業と短絡してしまい、職業人材の養成という、要するに大学が職業人を養成するための機関であって、その職業人足りうるために入試が存在するかのような議論が一方ではあったというのは、大学という社会的効用を無視した形でダイレクトに高等学校から社会へ職業人を送り込んでいくような錯覚を、委員の何人かの方が持っておられたということである。それはメリットクラシーの問題(短絡的な成果主義)をどう考えるかといった、大変に今日的な課題であるが、極めて危機的な状況になっており、入試の議論も中教審の議論もまた社会の議論も、非常に短絡的な成果主義が支配するようになってきている。中教審の委員の方で、高等学校・大学関係者以外の方のお話を聞いていると、これは短絡だと思ふことが何度もあった。そのことが合教科や総合型に結びついて議論がなされ、高等学校教育と大学教育を結んでいる絆が非常にあいまいなものになっていく。高等学校は学習指導要領に縛られている限りにおいて、そこで、そういう目標設定はしにくいし、どの生徒がどの大学を受けるかわからないところでは、ボリュームゾーンの生徒ほど一定の明確な目標を与えてやらなければ、ボトムアップ(学力を養成していくこと)は非常に困難だと思う。教科・科目で試験をしては難

しくなりすぎるので合教科ですという話であれば、それは前提が違うのではないか。

(荒瀬) 合教科・合科目型というのは、安直なものを作ろうといったことではない。学習指導要領で定められている各教科・科目のしっかりとした基礎学力や活用力に基づかない限り、総合的な学習の時間が活きないのと同様に、合教科・合科目というのも、それぞれの教科の基礎をしっかりと身に付けているということが当然前提である。

#### ◆高等学校・大学・社会のトランジションについて

(矢野) 学生の大学入試の成績と就職先の関連を調べ、それをもとに入試戦略会議を実施しているが、入試の成績と卒業後の進路がリンクしていないという結果が出た。ある意味、それはすごくいいことだと思っている。もし大学入試の成績順に良い就職先に入っていることになれば、大学での教育の中身は問われないことになる。入試の成績ではなく、所属ゼミとの関連があることが結果として出てきた。入試については、実施可能な範囲で基礎学力を担保できれば、あとは大学教育での勝負だと思っている。そのときにどういう仕組みで学ぶ気にさせるか、テーマを見つけてもらうかが、高等学校でも大学でも求められている。入試を技術的に変えても、実社会に出て求められる能力にどう結びつくだろうか。どんな形でもペーパーテストはペーパーテストである。いろんな人と関わりながら、いろんな経験をしながら身につけていく能力もある。高大コラボゼミをしても、教室やゼミでは冴えない生徒・学生が大観衆を前に立派に発表し受け答えしているのを見ていると、各教科の成績と本人の評価とをどうリンクさせるのか、評価の基準をもっと考えていかないといけないと思うが、それを大学入試にあてはめるとなると、技術的にすごく難しいだろう。

#### ◆参加者からの質疑について

●推薦入試やAO入試を秋入試にするという話は具体的に出ているのか。

(荒井) それは私の持論であり、表立っては出ていない。多くの私学が早くに学生を確保したいということでAO入試の普及が進んだので、実現は難しいとは思いますが、これらの入試の趣旨からすると、部活動やボランティアなど、3年間目一杯高等学校生活を満喫した人こそ、推薦・AO入試の推薦にあたるのではないかと考えている。1月2月に一般入試を無理に受けて入るのではなく、半年遅れかもしれないが秋入試で受けて、それらの試験で真価を問う方が、試験の有り様としては本筋ではないかと考えている。

●新テストの場合、職業高等学校はどうなるか。

(荒井) 一般入試・推薦入試・AO入試という区分が撤廃されることが予告されており、これから実際に、選抜要項なりがどういうふうに変更になるかはわからないが、おそらく区分は

なくなり、一般入試が早期入試・中間期入試・冬入試のように分かれてくるのではないかと思う。職業高等学校(専門高等学校)の場合にどうなるかという情報は持っていないが、当然実務的なことを考慮する際に、専門高等学校から推薦・AO入試でもって大学進学している方が相当数いるので、そのあたりの受験生の人たちが不利益にならない工夫がなされると思う。

●エリート育成はどうか。日本の教育の国際競争力は確保されるのか。

(荒井) 入試が変わろうと、それらについては全く影響がないと思っている。むしろ、文部科学省が大学のガバナンス改革や大学の運営費交付金の4割を成果主義で評価するようなことを言っているが、そのあたりの方が、日本の大学の国際競争力を低下させる危険が多分にあると思われる。

●大学進学を希望する生徒は全員、大学入学希望者学力評価テスト(仮称)を受ける義務があるのか。

(荒井) 今のセンター試験と同様に、それを指定する大学を受験する場合はそうなるだろうがそれを經由しなければ大学に進学できないというものではない。ただ、中教審の議論では、できるだけ多くの生徒に受けてほしいとなっている。

(椋本) 今回で第12回目を迎えました高大連携教育フォーラムは、設立当初から、高校と大学の円滑な接続を目指して参りました。中央教育審議会の方でも、平成24年9月に高大接続特別部会を設け、審議を重ね、近いうちに答申(「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」)が出されると聞いています。また、この答申は、たんに大学入試をどうするのかという点を答申するにとどまらず、ある意味で手つかずであった高校教育の質保証にも言及されているようです。また、高等学校新学習指導要領が、平成25年度入学生から実施され、高校現場では、さまざまな実践が始められているところです。

今回、そのような状況をふまえ、高校と大学の新しい接続教育の姿を2つの高等学校から紹介されました。また、達成度テストについては、荒井先生の特別講演を補足する形でこのディスカッションで深めていただきました。会場からは、中教審の委員であ



■満席となった会場

る荒瀬先生がご参加していただいたこともあり、このテストを構想した政策立案者の立場からご発表をいただき、私も司会の立場を忘れ、お二人の白熱した議論に聞きほれ、これからの課題が見えてきました。達成度テストとともに、各大学の入試はどんな学力を測定しなければならないのか、先行的な事例を京都工芸繊維大学からも紹介いただき、あらためてどのように高校と大学の接続教育を作るのかを考える機会となりました。これらの課題を、このフォーラムでは、皆様と一緒に考えていきたいと思えます。

本日は、ご登壇の皆様方、そして、会場から指定討論者的役割を果たしていただきました荒瀬先生に心よりお礼を申し上げ、本日のディスカッションを閉じさせていただきます。

第2部

第1分科会〈表現技法〉

「授業リフレクションとしての  
ラベルワークの実践」

**中地 譲治**

慶応義塾志木高等学校 教諭

**長谷川 伸**

関西大学 商学部 准教授

〈コーディネーター〉

**筒井 洋一**

京都精華大学 人文学部 教授

大学コンソーシアム京都 高大連携推進室

コーディネーター

## 第1分科会(表現技法)

### 「授業リフレクションとしてのラベルワークの実践」

報告者 1 中地 譲治 氏 (慶応義塾志木高等学校 教諭)

報告者 2 長谷川 伸 氏 (関西大学 商学部 准教授)

コーディネーター 筒井 洋一 氏 (京都精華大学 人文学部 教授  
/公益財団法人大学コンソーシアム 京都高大連携推進室 コーディネーター)

参加者数 41名

#### 概 略

2009年まで、本分科会は、高校側・大学側双方の発表を中心とする伝統的な方法で運営していたが、報告者から参加者への一方向の議論ではなく、むしろ参加者同士のインタラクションを深めることで、より創造的な議論を実現するために、2010年から分科会形式を報告者からの問題提起を触媒として分科会参加者自身がどれだけ学んでいくのかというアクティブラーニングの方法へと転換した。まず、コーディネーターから今回のテーマを説明した後、ラベルワーク手法の専門家である報告者1及び報告者2から報告を行い、最後にグループごとにラベルワークを実践し、意見交換を行った。

#### 【授業リフレクションとは】

教員がどれだけ伝えたかではなく、学生がどこまで学んだかという「教授中心から学習中心への転換」、つまり、アクティブラーニング型授業が今後の教育の方向性であり、その転換方法の一つとして、授業内でのリフレクション(振り返り)がある。

米国のFD専門家のL. Dee Finkは、アクティブラーニング型授業の特徴をPassive Learning、Activity、Reflectionの三つに分類しており、Passive Learningは知識や考え方の提供及び伝統的な教員によるレクチャー、Activityはレクチャー後にそれを観察や取材、実践などで身につけること、Reflectionは前二者によって学生がどこまで習得しているかを検証することである。つまり、アクティブラーニングは、経験的な活動を講義に取り入れたり、知識・情報等を取得するだけでなく、そこにリフレクションを入れることで、体験の価値が強化され、学生の気付きと次につながる学習へと導く機能を持っている。

しかし、多くのアクティブラーニング型授業は前二者で終わっている授業が多く、検証自体は伝統的な筆記試験やレポート等で代用されている。三つそろって初めてアクティブラーニングであり、Fink(※1)や山本以和子(※2)が述べているように、授業目標と学生の現状とのギャップを学生自らが確認できるのがリフレクションである。

【ラベルワークの意義】

そのギャップを確認する方法としては、様々なリフレクションの方法があるが、それらの中で、あえてラベルワークを取り上げる理由は、ワークを行う容易さである。授業終了後にリフレクションをおこなうとすれば、時間的にも限定されてしまい、容易に取り組める方法が望ましい。

今回の報告及び実習で行ったラベルワークを授業リフレクションの一方法と位置づけている。授業途中や授業終了後に、定型ラベルに学生が自省した内容を書くことは、Donald A. Schon が述べている「行為がおこなわれている最中にも〈意識〉はそれらの出来事をモニターするという」反省的实践(reflective practice)を意味する。授業の中で、できるだけ簡便にリフレクションを書きとめ、それを後に再構成することで、再度リフレクションできるツールとしてラベルワークの実用性は高い。これについて、分科会では、レクチャーと実習を織り込んで進化した。

ラベルワークの実践例：報告者 1(「国語表現」)

1. ラベルセッション

- ① クラスを5～6人のグループに分け、一人10分以内で自分の選んだ本のあらすじ、主要なテーマ、感想をグループ内で発表し、それを聞いた人は肯定的及び否定的な感想をラベルに1枚ずつ記入する。(感想ラベル)
- ② 感想ラベルをもとに順にラベルトークを行い、次回までにグループの人に書いてもらった感想ラベルをもとにラベル新聞を作成し、教員が各グループでのセッションを講評する。

2. ラベル図考

- ① 各グループで自己言及的な問いをテーマとして設定し、自分の思いを言葉で伝え、それを普遍的な言葉にまで深める。→ 共有性を高める
- ② そのプロセスを言語化・図解化して記録・作品化する。→ 累積性、責任性を高める。  
①②を通じて開放性を確保して外部と交流し、新たな言葉を生み出す創造性を発揮する。

ラベルワークの実践例：報告者 2(「ラテンアメリカ経済とビジネス」「国際投資論」「国際協力論」)

- ① 授業終了直前の8分前後で、1行目に日付、学籍番号、氏名、2-4行目に授業の要点を書く「要点ラベル」1枚と授業に対する感想を書く「感想ラベル」1枚を作成させる。ラベルは3枚複写式で3者間でシェアできる。
- ② 学期末にそれらを使って「要点ラベル図解」(※3)と「感想ラベル図解」(※4)を作成させる。

※3 内容が類似した「要点ラベル」を同じ「島」にして、それに相応しいタイトルをワンセンテンスで付け、それぞれの「島」に「関係線」を引いて構造化し、図解全体の結論を書かせ、さらにその結論のエッセンスをタイトルとして書かせたもの

※4 時系列に感想ラベルを用紙に貼り付け、全ての感想ラベルにコメントを書き込み、図解全体の結論を書かせ、さらにその結論のエッセンスをタイトルとして書かせたもの

### ラベルワーク及びラベルセッションの実習

まず、参加者を 4 名程度のグループに分け、開始前にラベルを配付して①午前の部の感想②本分科会への期待を記入してもらい、自己紹介を兼ねて①・②によりラベルトークを行った。

次に、報告者 1 及び 2 の実践事例を聞いた後、③報告者 1 の感想④報告者 2 の感想を記入し、③・④によりラベルトークを行い、その感想を⑤・⑥・⑦・⑧に記入して複写式ラベルの 1 枚を相手に渡し、最後に、①～⑧のラベルを利用して個人図解を作成し、相互評価を行った。

### 分科会報告に対する質疑(抜粋)

Q:ラベルの活用方法を教えてほしい

A:3 枚複写式なので同時に 3 方向への発信が可能であり、必ず 1 枚は学生本人の手元に残るようにし、あとは担当教員が回収してフィードバックや出席管理に活用したり、グループでのラベル新聞作成にも活用できる。

Q:成績はどのように評価しているか

A:学生の学習上の変化や到達を直接評価するのではなく、ラベル図解を学期末課題とし、出席数と教員が指定した形式的要件をどれだけ満たしているかで評価している。

Q:大学入試を控えた生徒にどのような効果があるか

A:ペーパーテストだけではない入試の現状をふまえると、行動力、言語以外で伝える力、表現力などの涵養に貢献できると考える。

### 分科会報告に対する感想(抜粋)

#### 【学生にとっての価値】

○ラベル記入とラベル図解作成によって、授業を 2 回振り返ることができるとともに、自らを客観的に考察することができる。(メタ認知)

#### 【教員にとっての価値】

○学生が作成するラベルとラベル図解が教員へのフィードバックとなる。

○生徒たちが授業に集中するとともに、生き生きと取り組んでくれる。

○どのようなレベルの生徒にも言語活動として利用でき、自由度の高いアクティブラーニングが実施できる。

### おわりに

アクティブラーニングという言葉が急速に普及しているが、教員-生徒、生徒-生徒間の多方向的な言語活動の活性化を主な狙いとしているように見受けられ、その意味ではラベルワークは言語活動に寄与する方法の一つであり、両者の親和性は極めて高いと思われる。しかも、ラベルワークはリフレクションを前提に、その方法、理念が組み立てられており、学び方を学んでいるというメタラーニングも実現できる。アクティブラーニングとメタラーニングが一体となってはじめて

「学び」は自己組織化される。

ラベルに書き、書いたことを人に話し、聞く人にラベルを手放し、聞く人はラベルを受け取り、そして読むという言語活動がラベルワークによって保障される。また、自他の交流が自然と生起し、一人ひとりの書いたラベルは、その書いた者の人格の一部をなす。ラベルワークは単純な原理で成り立っているが、だからこそ人類の言語活動の深さにまで結びつく。多くの教員にぜひ実践していただきたい。

#### 参考文献

※1 L. Dee Fink 『学習経験をつくる大学授業法』(玉川大学出版部、2011年。)

※2 山本以和子 「学習成果についてのリフレクション」

筒井洋一他 「教育の質保証に向けた授業見学者による授業リフレクションの意義」

『大学教育学会誌』第36巻第2号(大学教育学会、2014年11月。)

- ・ Donald A. Schon 『専門家の知恵—反省的实践家は行為しながら考える』(ゆみる出版;2001年。)
- ・ 筒井洋一 「授業をオープンにすると、学生の学びが変わる—見学者や授業協力者が授業を創る—」  
『ヒューマンスキル教育研究』第22巻(秘書サービス接遇教育学会、2014年3月。)



第2部

第2分科会〈数学〉

「高大連携による  
数学的活動を取り入れた  
教材の紹介と実践報告」

**松田和真**

京都府立南陽高等学校 教諭

**深尾武史**

京都教育大学 教育学部 准教授

〈コーディネーター〉

**遠山秀史**

京都府教育庁 指導部 高校教育課 指導主事

## 第2分科会(数学)

### 「高大連携による数学的活動を取り入れた教材の紹介と実践報告」

報告者 1 松田 和真 氏 (京都府立南陽高等学校 教諭)

報告者 2 深尾 武史 氏 (京都教育大学 教育学部 准教授)

コーディネーター 遠山 秀史 氏 (京都府教育庁 指導部 高校教育課 指導主事)

参加者数 33名

#### 概 略

新学習指導要領で強調されている「数学的活動」について、多くの教科書で「課題学習」が新設されたが依然として教員の裁量に任されている部分が多い。数学的活動の配慮事項として学習指導要領に記されている「自ら課題を見だし、解決するための構想を立て、考察・処理し、その過程を振り返って得られた結果の意義を考えたり、それを発展させたりすること」「学習した内容を生活と関連付け、具体的な事象の考察に活用すること」「自らの考えを数学的に表現し根拠を明らかにして説明したり議論したりすること」について既習の学習内容を振り返りつつ、それらの活動が中心となる教材の紹介ならびに実践報告が行われた。

まず、〈報告者1〉から、2次関数を題材とした高大連携授業について、到達目標や授業内容が紹介され、成果と課題が報告された。

次に、〈報告者2〉から、学習指導要領上での数学的活動の位置づけや教材開発における課題、高大連携による数学的活動の可能性について報告された。

グループ協議では、各高等学校で実践されている数学的活動について交流し、成果や課題、今後の可能性について協議を行い、各グループから協議内容について報告を行った。また、この授業実践に参加した大学生8名も協議に加わり、フロアからの質疑に答えてもらった。

最後に、報告者2から、高大連携の活性化や教材・教具のシェア、教材作りなどが提案された。

#### グループ協議での意見(抜粋)

- 進学校においては、受験勉強との両立が難しい。
- 入試問題にも数学的活動の要素を入れるべきだ。
- 数学的活動のデータベースを構築すべきだ。
- 個人としてだけでなく、教科等の組織として取り組むことが課題である。
- 学校、生徒の状況に合わせた目標設定が必要である。

### 分科会における到達点・今後の課題

今回報告された教材について、「放物線であるという提示をしてしまうのではなく、その性質を見つける活動をさせることこそが大切で、数学的活動としてより良いものになるのではないか」という発展的な意見がある一方で、「今回の展開の仕方は生徒が優秀だからできるものであって基礎・基本の定着がままならないクラスでは関数の利用、放物線の利用について、何をどう利用するのかについてもっと指導を入れていかなければ活動が進まないのではないか」という意見もあった。「何を前提として、その前提や既習事項を使って、何をどこまで解決させるか」の設定が重要であり、対象となる生徒の発達段階に応じてそれを適切に設定することの重要性が再確認できた。評価に対する意見もいただき、この種の生徒の活動についてどのように評価をするのか、指導者側の主観だけで評価されることの無いよう考慮することも、今後の課題の一つである。

また、数多くの先生方が興味深い様々な教材を使用されており、「数学的活動」を重視した数多くの教材やその素材のアイデアを知ることができ、今後の教材開発に向けて学びの多い討議となったと同時に、基礎・基本の定着に向けて、今回報告したイベントのような「数学的活動」を含む教材だけでなく、日々の授業の中で取り扱う「数学的活動」を含む教材を求める意見が少なくなかった。この点についても報告者と同じ問題を抱える先生が数多くみえることが確認できた。

さらに、教材開発の体制作りにについても、個人レベルでの教材開発には様々な制約から限度があること、「数学的活動」を含む教材のデータベースを構築することが重要であること、高大連携を通じて教具の制作や教材開発の効率化を図ることなどの意見を頂き、今後も高大連携の取り組みを継続していく価値を見いだせるものとなった。



第2部

第3分科会〈英語〉

「発信力を重視した  
英語コミュニケーション能力の育成を  
目指した指導と評価について」

**國松裕子**

京都市立西京高等学校 教諭

**泉 恵美子**

京都教育大学 教育学部 教授

〈コーディネーター〉

**太山陽子**

京都市教育委員会 指導部 学校指導課 指導主事

### 第3分科会(英語)

「発信力を重視した英語コミュニケーション能力の育成を目指した指導と評価について」

報告者 1 國松 裕子氏 (京都市立西京高等学校 教諭)

報告者 2 泉 恵美子氏 (京都教育大学 教育学部 教授)

コーディネーター 太山 陽子氏 (京都市教育委員会 指導部 学校指導課 指導主事)

参加者数 17名

#### 概 略

〈報告者 1〉から、英語での発信力を伸ばすための取組や提案があった。主に、英語科のカリキュラムの中心となっている、IEC(=Integrated English Competency)と EEC(=Expressive English Competency)を中心にその指導と評価の紹介があった。IEC では、「コミュニケーション英語 I」の教科書を使用し、4技能をバランスよく伸ばさせるための言語活動例とパフォーマンス課題例が紹介された。また、EEC においては、特に「話すこと」「書くこと」の2技能に重点をおき、「話す」ための基礎的な訓練から最終的にはテーマに対する自分の意見を述べるスピーチやプレゼン、また、テーマを多面的に考えるディベートまでの指導と評価の報告がなされた。

〈報告者 2〉からは、現在の日本の英語教育が置かれている状況の説明とともに、小中高大を通じて最終的にどのような英語学習者を育てていくのか、またそれぞれの発達段階でどのような点に留意して指導をしていくべきかが提案された。その上で、コミュニケーション能力育成のために大学で行っている、音読やシャドーイングで言語を内在化させ、要約や討論、発表を通して使える英語の習得を目指す過程、また、e-learning による自学自習やコミュニケーション方略の集中訓練等、発信型コミュニケーション能力の育成のための指導と評価の紹介があった。

#### 分科会報告に対する質疑

Q: 高校では、生徒の日本人としてのアイデンティティを発達させていくためにどのようなことをしているか。

A: ディベートのためのリサーチの中で、日本はどのように世界とかわかっていくべきかを考えるきっかけとなるようなテーマを設定している。また、学校全体の取り組みに関しては、様々な分野で活躍されている方々をお招きしての講演会や、伝統芸能鑑賞会といった機会も多々あるので、それらを通じてアイデンティティの意識は自然に高まっていると考えられる。

Q: 生徒の発音がよくないケースが見られるという報告があったが、グローバル化の中ではさまざまな英語を話す人が多く、ある程度なまりのある発音でもいいのではないかと？

A: 小学校段階だと、やはりきれいな英語を聞くときれいな英語を真似して話す、という事実がある。提示する英語のモデルとしてはできるだけいい英語の方がいいのではないか。

Q: そうなるとネイティブスピーカーをもっと増員すべきという方向になるのか。

A: 必ずしもその必要はない。小学校の担任の先生はCDやDVD等の音声教材を使用して標準的な英語を提示することが可能。専科教員等の活用も考えられる。必ずしもALTを増やさなければならないということではない。また、グローバル化という観点から言うと、「グローバル人材」の解釈は人によって捉え方が異なるが、最低限の英語は必要だという共通理解はある。そのような意味で日本人英語でも構わないと思うが、伝わる英語(intelligibility)を重視したい。また、補足だが、「グローバル人材」という言い方は経済界から出てきた「即戦力」を求める言葉なので、「グローバルシティズン」という方がいいのではないかと思う。

Q: 高校では、実際に他国の方とディスカッションする機会等はあるか。

A: 1年生全員が、アジア諸国への海外フィールドワークに参加し、現地の学生とB&Sで調査活動や交流をしている。また、2年生で夏期海外研修(希望者対象)に参加し、そこでアメリカの学生等と議論を深める生徒もいる。また、諸外国の訪問団を定期的にも臨時にも受け入れることが多く、一緒に授業を行ったり、ディスカッションを行ったりする機会に恵まれており、伝わる実感を得るとともに、伝えるためにはもっと英語によるコミュニケーションの力を磨きたいと思う生徒も多い。

#### グループディスカッションのまとめ

3グループに分かれ、各グループ内で英語での発信力を伸ばすための取組および今後に向けての提案について話し合った結果は、以下のとおり。

○グループ1: 発信面ばかり重視していると内容が深まらないのではないかという懸念がある。

インプット→インテイク→アウトプットのステップをきちんと踏みたい。インプットとしての多読や内容面での他教科との連携が必要。アウトプットのためのインプットという観点を大切にしたい。

○グループ2: 小学校や中学校で熱心に発信活動を行ってきても、実際に高校では論理的に書けない、という現実もある。インプットを増やす必要があるのではないか。日本語で言えないことは英語でも言えない。また、論理的に話すためのノウハウを小学校・中学校・高等学校を通じて教えていくような機会は作れないか。英語科だけでなく他教科とコラボしてそのような機会を多く作る必要もあるのではないか。

○グループ3: 日本語でもコミュニケーションを上手にとることは難しい。ディスカッションをさせるときにまず日本語で考えを深めて、日本語で十分行ってから行う方がいいのか、英語の発表やディスカッションの型を覚えさせてからとにかく英語の形からはいるべきか迷うところである。型を教えて英語でディスカッションすることは可能だが、それだけでどこまで応用力がつくのか分からない。



第2部

第4分科会<理科>

「高大連携による  
龍谷大学附属平安高等学校における  
理科の取り組み」

**中島和也**

龍谷大学附属平安高等学校 教諭

**藤原 学**

龍谷大学 理工学部 教授

<コーディネーター>

**林 久夫**

龍谷大学 理工学部 教授

龍谷大学 高大連携推進室長

## 第4分科会(理科)

### 高大連携による龍谷大学付属平安高等学校における理科の取り組み

報告者 1 中島 和也氏 (龍谷大学付属平安高等学校 教諭)

報告者 2 藤原 学氏 (龍谷大学 理工学部 教授)

コーディネーター 林 久夫氏 (龍谷大学 理工学部 教授/龍谷大学 高大連携推進室長)

参加者数 21名

#### 概 略

龍谷大学理工学部へ付属校推薦入試(専願)で入学を希望するコースでは、高校3年時に大学と連携して理科に関する2つの事業に取り組んでいる。1つは、正課カリキュラムの「理数研究」という授業で、主な内容は、物理と化学に関する2時間連続の実験授業とそのレポート提出、生徒の研究発表プレゼンテーション、そして大学教員による特別授業である。今1つは課外プログラムの科学図書レポートであり、3回作成させるが、特に2回目では大学のオープンキャンパスに出向き、大学教員からマン・ツウ・マン指導を受け、また理工学部の研究室公開に参加する。これらを通して受験勉強にとらわれることなく、高校時代に必要な物理と化学の基本的な知識・技能の習熟と科学的な思考力・表現力の育成や専門分野に対する興味・意欲の喚起を図っている。

まず、〈報告者 1〉から、「理数研究」の物理分野における実験を主体とした授業について、シラバス、生徒に配布する実験解説書、レポートの書き方などの豊富な資料に基づき、詳細な解説がなされた。また、実際の実験装置を持ち込んで演示実験が行われ、生徒によるプレゼンテーション、レポートの実例が報告された。

次に、〈報告者 2〉から、「理数研究」の化学分野における実験内容、実験に対する基本姿勢、安全対策、環境に対する配慮等について、準備の要領、生徒の反応や生徒間の議論の内容などの報告がなされた。また、プレゼンテーションにおける大学教員の立場からのコメントの工夫、文章を書くことの重要性、高校の化学と大学の化学の違いについても言及があった。

最後に、フロアから質問票を集め、その内容に基づいてパネルディスカッションを行った。

#### グループ協議での意見

##### 【高大連携の意義や魅力について】

普段接することの少ない大学教員にマンツーマンで指導を受けること自体が刺激になる。高校と大学では目のつけどころが違うと思う。大学教員側からすると、高校教育の現状を知

ることができる点、大学入学後、どの部分がどの程度必要かを高校側に伝えることができるという点で意義深い。

#### 【高校・大学双方の負担について】

実験授業の場合にはかなりの負担があるのは事実であり、高校側として連携授業は緊張するのも事実である。大学教員としては高校生のレポートを見るのは新鮮で楽しく、高校の先生の苦労もわかってよい。特に、手をかけた生徒が成長しているのを見るとやりがいを感じる。ただ、個人の熱意に頼るところが多いので、すべての教員に理解されることが望ましい。

#### 【高大連携の効果について】

連携授業は3年生対象なので高校の範囲で直接効果は図れていないが、大学入学後に効果が表れるものと考えている。今見えていなくとも多角的な教育は生徒の理解を深めるものである。

#### 分科会の到達点・今後の課題

高大連携・接続は高等中等教育における最重要課題の一つであり、高大双方がその必要性を認識して、今後も推進していくべきとの点では共通認識が得られた。ただ、そのあるべき姿については、高大双方でまだ模索中である。たとえば、高大連携に係る労力は決して軽くないにもかかわらず、多くの連携事業が一部の熱意ある教員の、いわばボランティア精神に支えられているという側面は看過できない。高大連携事業の意義とそれに充てられる労力が、高校と大学の双方によって正当に評価され、永続的に活動できるようなシステムが構築される必要がある。

また、効果的な展開を図るためには客観的な効果の測定が不可欠であるが、高大連携も、教育というものが本来的に持つ特性として、短期間で測定することが困難である。信頼に足る評価指標を構築するためには、高校・大学双方におけるデータの蓄積が必要であり、そのための方向論の確立も急務である。



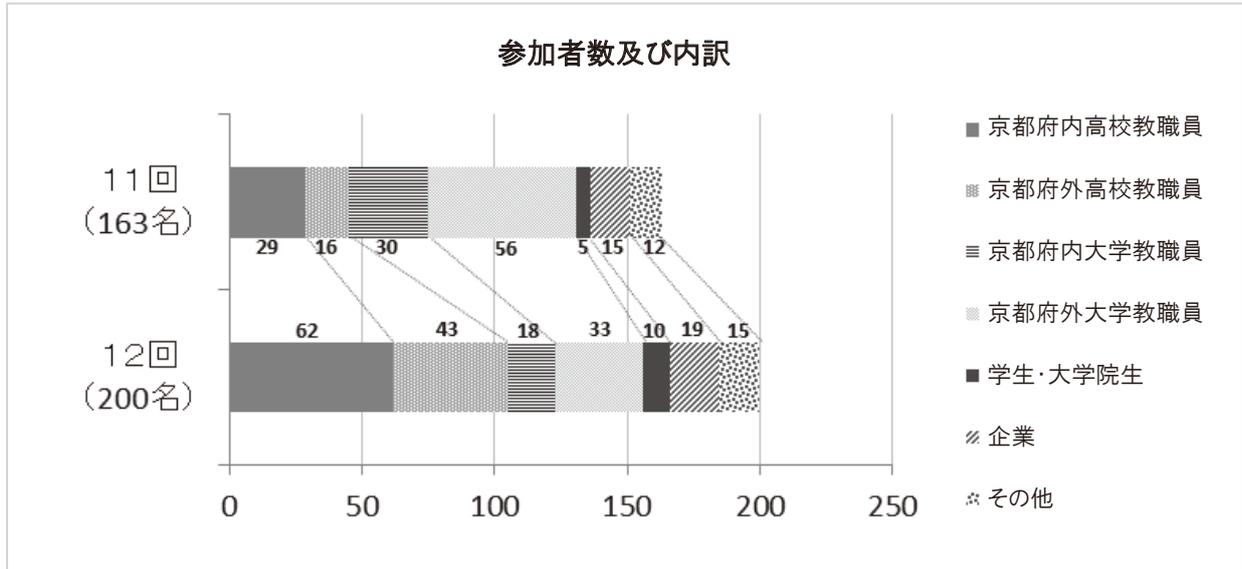
## アンケート結果

---

## 第12回高大連携教育フォーラム アンケート結果

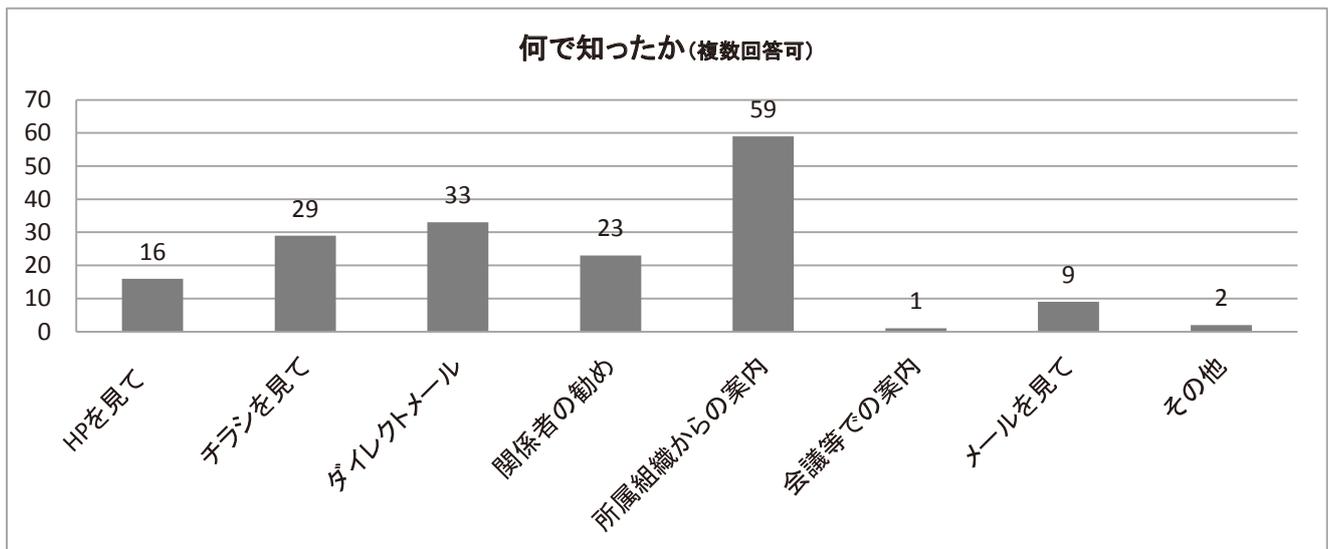
### 1. 参加者数及び内訳(部分参加者も含む)

一般参加者数 200 名(※163 名)のうち、高校教職員 105 名(※45 名)、大学教職員 51 名(※86 名)となっており、昨年度と比較して全体の参加者が 1.2 倍ほど増加し、内訳をみると高校関係者が著しく増加した一方、大学関係者が昨年度の半数程度となった。 ※( )内は昨年度の参加者数



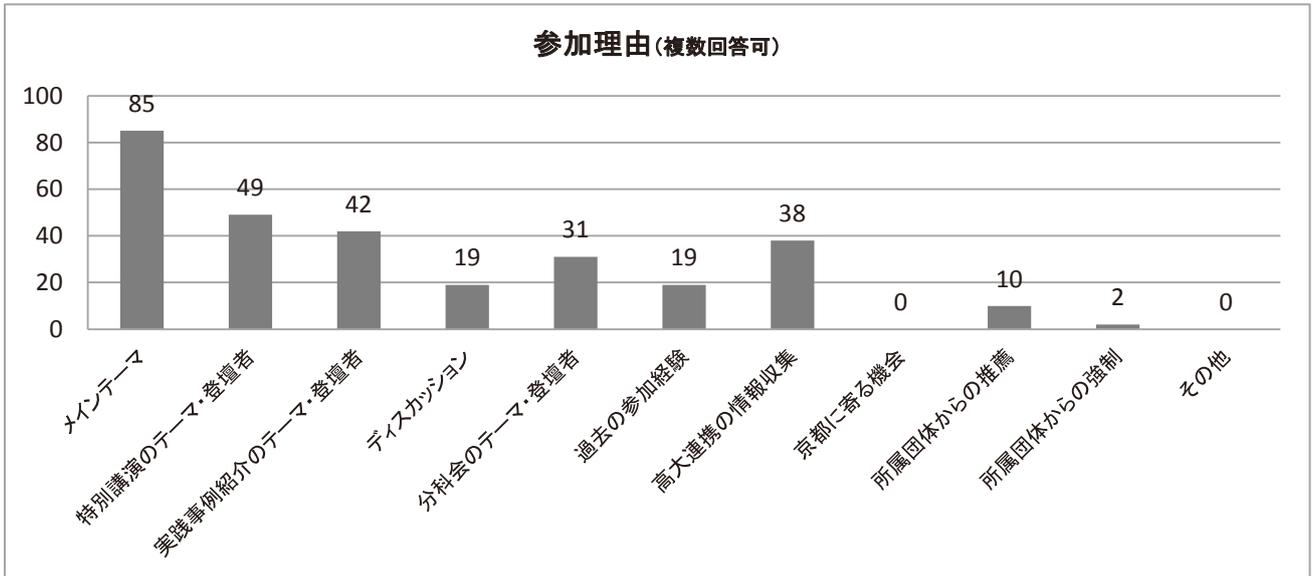
### 2. フォーラムを知ったきっかけ

所属組織からの案内や過去に参加されており直接チラシやメールをお送りした方の参加が多かった。



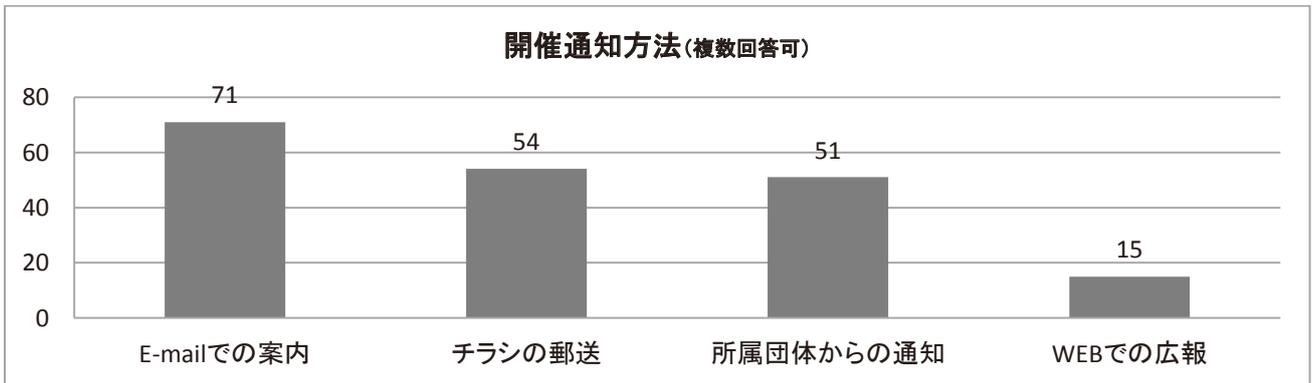
### 3. フォーラムへの参加理由

メインテーマ「高大接続と学力形成～達成度テスト(仮称)について考える～」に興味のある方が最も多く、次いで特別講演や実践事例のテーマ・登壇者に興味のある方が多かった。また、高大連携の情報収集と答えた方もあり、所属団体からの強制ではなく自主的に参加いただいた方が多かった。



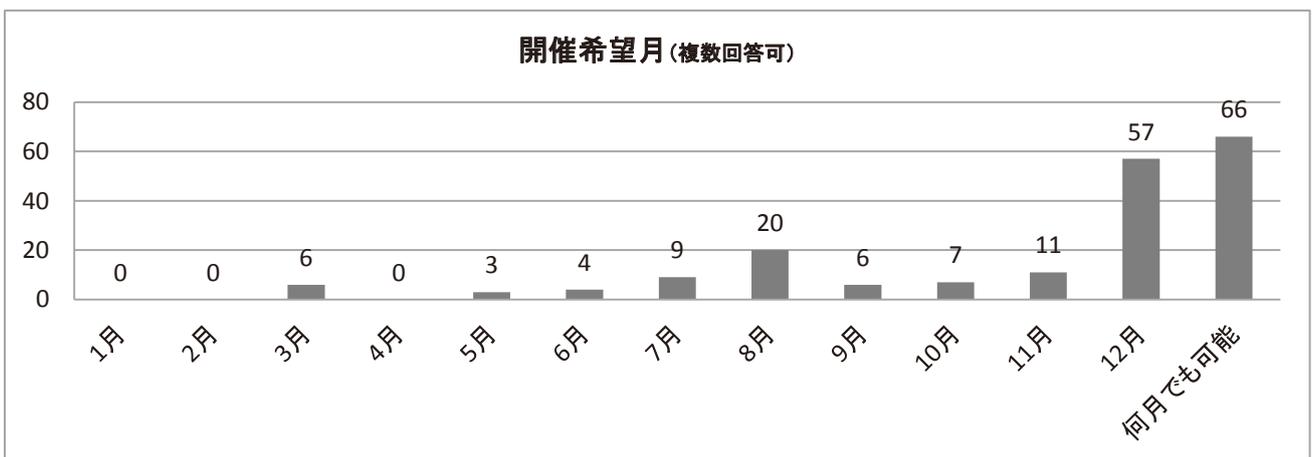
### 4. フォーラム開催通知方法

チラシの郵送を中心に通知してきたが、E-mailでの案内を希望する声が多かった。



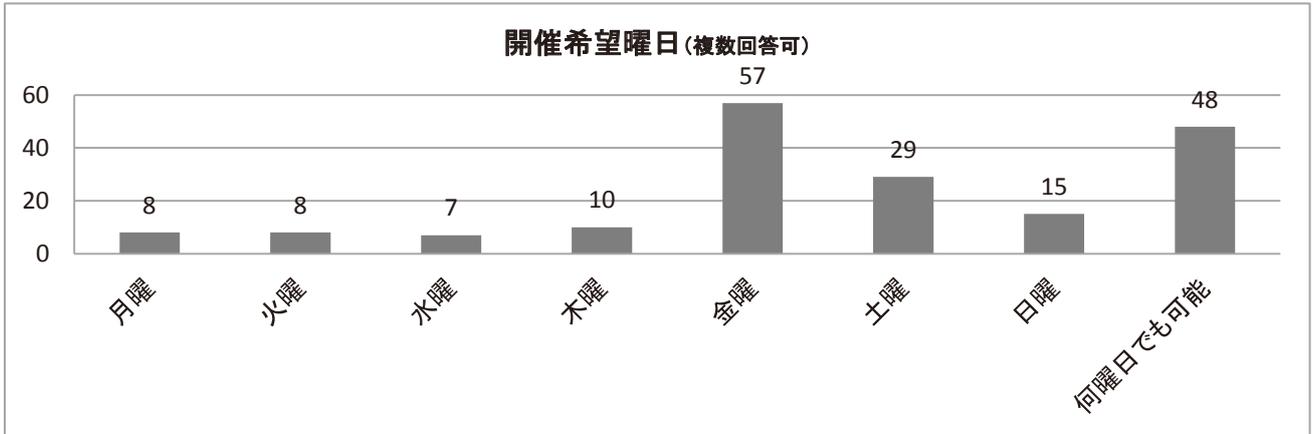
### 5. フォーラム開催の希望月

何月実施でも良いという回答が一番多かったが、高校教員からは期末考査時期で校務閑散期である12月を希望する声も多かった。



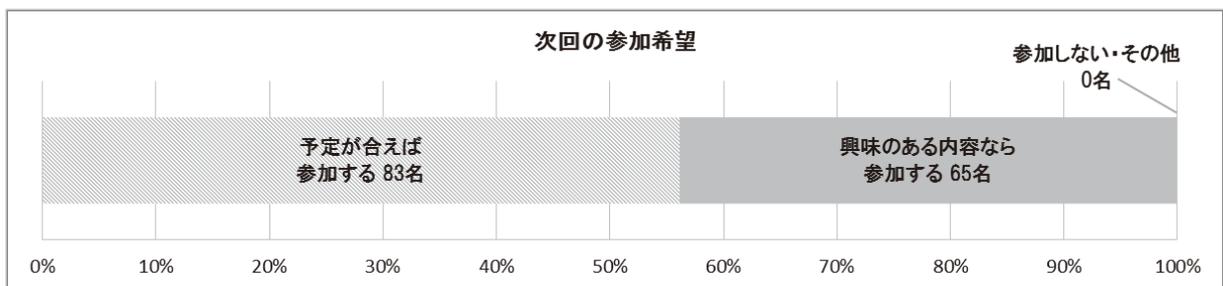
## 6. フォーラム開催の希望曜日

遠方からの参加者は移動や宿泊施設等の関係により金曜日開催を希望する方が多かったが、授業がない土日を希望される教員もあった。土日も授業がある私立高校の方は日曜を希望されていた。



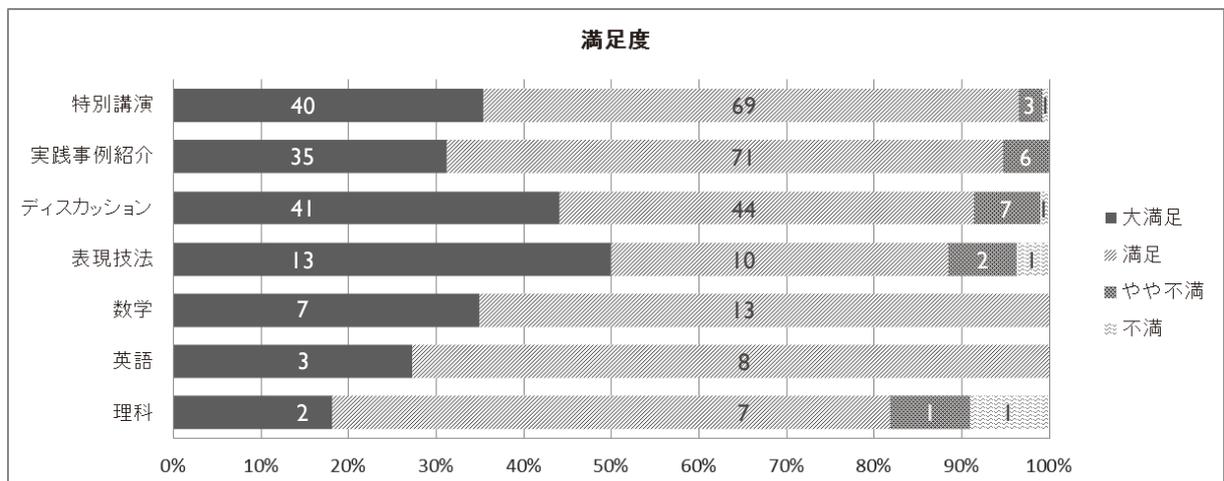
## 7. 次回の参加希望

「非常に勉強になる」「新しい取組みを知ることができるので楽しみにしている」「毎年新たな発見をしているのでぜひ参加したい」といった声が多く、リピーターが多いことがうかがえた。



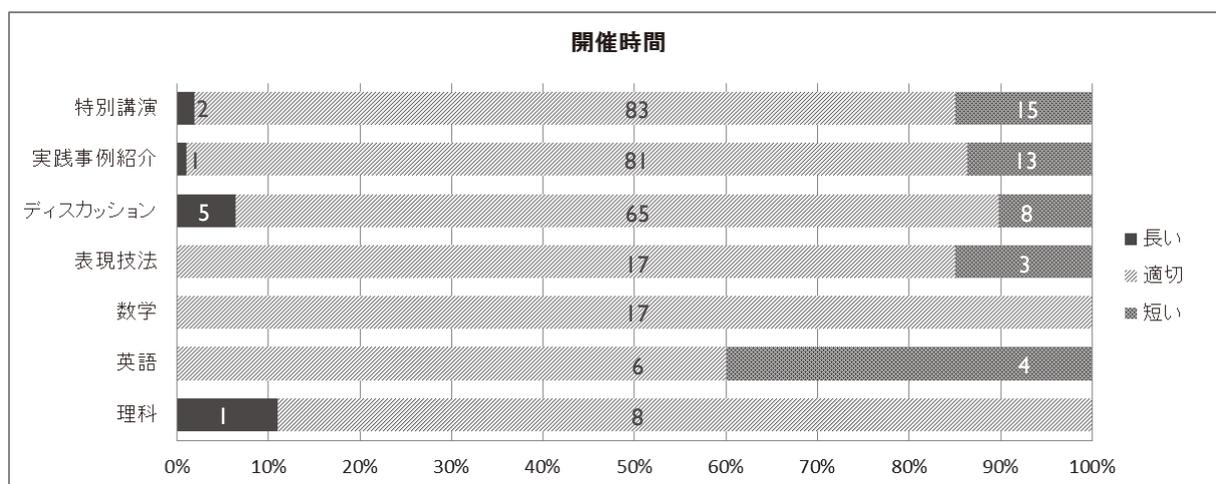
## 8. 各企画満足度

どの企画も「大満足」「満足」と回答された方が8割以上あり、満足度が高かった。



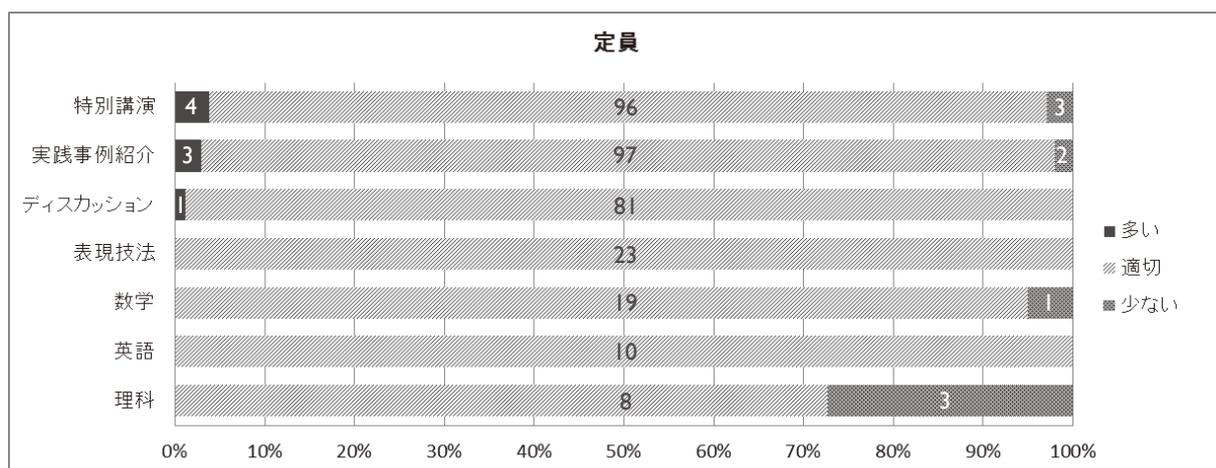
## 9. 各企画開催時間

どの企画も「適切」と回答された方が6割以上あり、時間配分はほぼ適切であった。



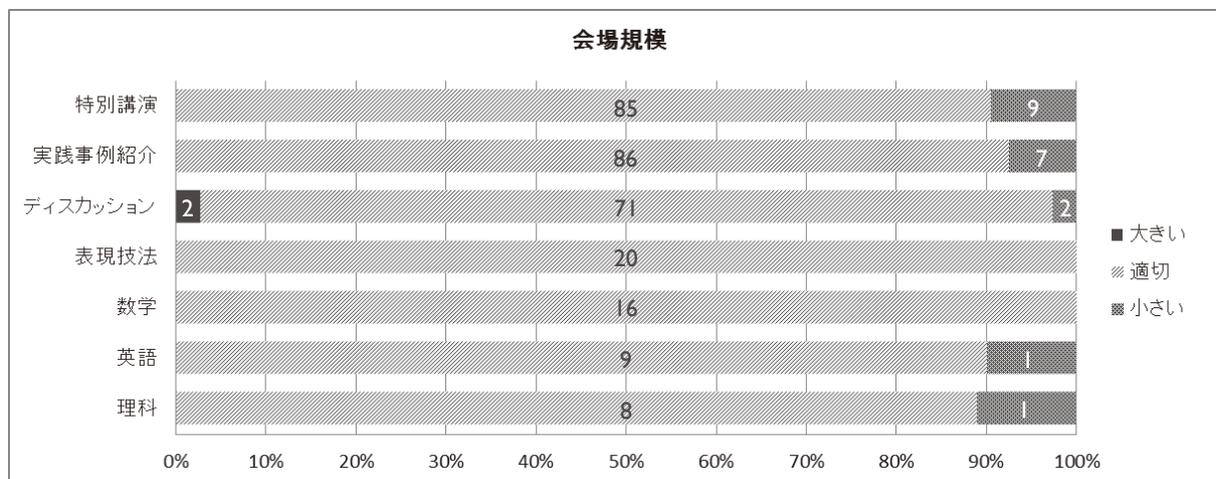
## 10. 各企画定員

どの企画も「適切」と回答された方が7割以上あり、定員はほぼ適切であった。



## 11. 各企画会場規模

どの企画も「適切」と回答された方が8割以上あり、会場規模は適切であった。



## 1. 今後取り上げてほしいテーマ・報告者として招いてほしい人物

### 【高校教員】

- ・高大接続の中で職業高校の場合どうなるか、(達成度テスト)にふれてほしい。
- ・政権政党である自民党、公明党で、文教関係に取り組んでいる文教族若手政治家に立法者の立場から語ってもらおう。
- ・高校教育の現状紹介(レベルの異なる個々の高校から、また専門高校など)
- ・引き続き、高大接続につながる大学入試について
- ・海外の大学の入試担当者、海外の高校(フランスやドイツ)の教育行政担当者
- ・今回のように実際に制度、システム、施策の設計に携わっておられる方の話が聞けるのは有難い。
- ・キャリア、グローバルにおける高大連携/内田樹先生
- ・アクティブラーニングの実践
- ・内田樹先生・教育とは？変えてはいけないもの。または、教育評価について内村浩先生のお話をまた聞きたい。
- ・奈良県にも教育者養成のため、高大連携している県立高校があり、その実践報告を聞いてみたい。
- ・高校、大学の立場からの入試の実情について
- ・大学入試については今後も取り上げてほしい
- ・大学入試改革の関係者
- ・文科省の方に来て頂くのはいかがでしょうか？
- ・今回は自校の報告でしたので、他校の関係の取り組みの報告を知りたいです。
- ・大学入試制度
- ・高校での大学入試に対する対応について、今後の変化→大学入試センターの今後

### 【大学教員】

- ・日本の大学の将来—予想される姿と望ましい姿—(都心型・地方型、大規模校・小規模校、理系・文系など具体的に)
- ・評価法がキーと考えています。何をやるにしても、評価の観点の設定までなんとかこぎつけても、具体的評価法が問題になります。担当者の過負担にならないできるだけ客観的な評価法を知りたいと考えています。
- ・高大接続における、大学が求められる役割
- ・Early College について
- ・高大接続は今後一年間の間にまだまだ動くと思うのでもう一度取り上げてほしい。
- ・次回も達成度テストの状況は知りたい。
- ・入試(選抜)、接続、連携の関係が整理できるようなフォーラム

### 【大学職員】

- ・反転授業・アクティブラーニング
- ・データを活用した高大連携/内部進学

### 【企業】

- ・入試における多面的・総合的評価の実現性と導入手法
- ・活用の力を育むため教材や指導方法について

- ・英語外部入試について
- ・大学教育、入試の変化(センター試験等)の変化、大学と高校教育の関連を取り上げてほしい。

## 【学生】

- ・環境教育や情報教育と、教科科目との連携など

## 2. 各企画・フォーラム全体への意見・感想

### (1) 特別講演

- ・新しい情報があった。
- ・「選抜から評価へ」がキーワードですね。京工織の内村先生が指摘された様に、その人物のモチベーションや知識の活用力を今取り組んでいる試験でどう評価できるのか不安です。大阪のコンソでの講演で荒井先生がおっしゃられた試験問題の評価ランク付けと評価毎の問題データベースの構築は、私個人としては不可能であると思っています。
- ・知りたい内容でありがたかった。
- ・先日の新聞報道でいよいよ本格的に「達成度テスト」が導入されるのかと思い、ちょうどこのフォーラムのメインテーマになることを知り、ぜひ詳しく話を聞きたいと思い参加し、ばっちり話を聞けてとても良い機会でした。
- ・中教審答申による外部識者とは異なる、実際に関わっている先生の話が聞けてよかったです。次回も今後の入試制度をテーマとして引き続きご意見・問題点を取り上げてほしい。
- ・共通試験の歴史や日本の教育環境をコンパクトに説明してくださった上で、達成度テストの問題点も指摘されて、とても実のある内容でした。この見解を協議会として中央教育審議会に提出していただければ有難いです。(不勉強で失礼なことでしたら申し訳ございません)
- ・立場の異なる方と並列して聴きたい→ディスカッションの際にフロアから中教審部会委員の方からの説明、意見表明があったのは非常に良かった。
- ・非常に良かったと思います。
- ・今回の入試改革の実施課題について理解することができた。
- ・もう少し時間をかけて聞きたかった。
- ・中教審や文部行政の問題点や制度の弱点なども紹介して頂き、参考になりました。
- ・新しい視点・観点を知ることができました。
- ・やはり時間が短い。慌ただしい印象を受けた。
- ・共通試験に関する前段が少し長かったために、荒井先生の本音がもう少し聴きたかった。中教審の答申に対して、批判的に考えられていることにももう少し説明して欲しい。
- ・今後の見通しについて、予測でしょうが、知りたいと思いました。
- ・国の施策を考えている人の話はやはり違います。上層部でどんな議論がなされているのかよくわかりました。
- ・もう少し時間がたっぷりあった方がよい
- ・時間が短かったため、もう少しお話を聞いていたかったと感じました。問題点だけでなく(今一番気になるテーマでもあり)今後実際にどのようになっていく見通しなのかも含め、お聞きしたかったです。
- ・高等学校基礎学力テスト、大学入学希望者学力評価テストの問題点について理解が深まりました。
- ・かねてより不安の強い接続テストであったが、課題の多さ、深刻さをお聞きすることで、高校現場での準備が多難であるとの覚悟ができた
- ・これからの・・という視点を少しでも知る貴重な機会であった。自分の授業の中で、どうやって新しい視点を入れたカリキュラムを作っていくか考えていきたいと思う。

- ・中教審答申の問題点もよく分かりました。ありがとうございました。
- ・新しい達成度テストについて、実際のテストを作成する機関の側からの意見が聞けて興味深かった。テストについての問題点がある中、これからどのように実施に向けて改革が行われるのか知りたい。
- ・高等学校基礎学力テストと大学入学希望者学力評価テストの内容と問題点がより明確になった。
- ・冬で荷物が多いこともあり、手狭であった。内容に興味深く拝聴した。
- ・中身の深いお話だったのでもう少し話を伺いたかった。
- ・入試方法などがどのように変わるのか、何が原因なのかということが少しずつだが理解できた。
- ・大変わかりやすく説明して頂きありがたかった。頭の中がきれいに整理できた感じです。
- ・センター試験の廃止に関していろいろと騒がれていたものの、その背景や意図まで詳しく理解していなかったので、とても参考になりました。
- ・改めての確認ができました
- ・大学入試のこと、共通試験を実施する目的など知らないことがあり、今日少しずつ知ることが出来て良かったです。
- ・充実した内容をありがとうございました。
- ・現在までの大学入試の課題についてよく理解できた。高大接続という観点から大学入試、試験のあり方を見直す必要性に重みがなければいけないということを考えさせられた。
- ・現実問題として実施運営の立場からの意見が聞けた。
- ・できればもっと詳しい内容が聞きたかった。
- ・初めて参加して大変参考になりました。
- ・私も今回の答申報告性に疑問を感じている 1 人です。荒井先生のお話を聞き、同意です。また、実施までの時間があまりにも短く、問題を作成する側のことを何もわかっていないという気持ち、本当にそう思いました。今後の議論で中身の伴ったものにしてほしいです。

## (2) 実践事例紹介

- ・一般的な高校の事件(課題など)の整理があれば良い。
  - ・三事例とも大変興味深く参加になりました。
  - ・大阪府立高校、群馬県の事例など、地元関西と関東など全国的な実践例をご紹介いただき大変参考になりました。
  - ・特色ある大学入試(ダビンチ入試)など他の大学も含めいろいろ今後もお伺いしたいです。
- (IB の TOK のような授業展開の可能性について)
- ・高校の可能性を改めて感じる事ができました。ありがとうございました
  - ・素晴らしい取り組みについて紹介していただきありがとうございました。これらの成果を他大学・他高校に広げるためにはどうしたらよいでしょうか。
  - ・2 と 3 が本校の取組に生かせそうです。
  - ・非常に良かったと思います
  - ・時間の関係で大阪府教育センター附属の発表のみ→大学教員としては大変勉強になりました。
  - ・30 分ずつでは短く感じた。ダビンチ入試は何らかのヒントになると思う(大学の規模にもよるが)
  - ・実践事例についてどの事例ももう少し長い時間、報告を聞きたかった。
  - ・こんなに具体例が豊富にあり、驚きました。資料の体裁が様々でやや見づらかったです。
  - ・各報告書の内容とともに、非常に分かりやすく、今後の指導にも参考になると思います。
  - ・センター附属の実践例は興味深く聞かせて頂きました。

- ・3 事例の紹介でありましたが、一つ一つの事例をもっと詳しく聞きたかったので、2 事例でもっと 45 分ずつ等にさせていただきたかったです。
- ・大阪府教育センター附属高校の発表については、時間不足のためか、内容を十分に聞き取ることができませんでした。
- ・探究ナビ、アクティブラーニングの実践は、総合学習を行っていく上で大変参考になりました。
- ・いずれの方も、丁寧な説明と明確なお人柄のしのばれる話法で、内容がよく理解できました。
- ・評価基準をすごく細かく考えておられ、参考になりました。(大阪府教育センター附属高校の発表)
- ・それぞれのお取り組み、興味深く拝聴しました。大変参考になりました。ありがとうございました。
- ・大阪府教育センター附属のような取り組みは今後増えていくと思いますが、どこも全校での取り組みはありません。全体で行うとなると大変多くのマンパワーが必要になると思います
- ・ダビンチはよかった。
- ・ダビンチ入試に非常に興味があつてとても参考になった。
- ・好い事例を 3 つも紹介して頂き感謝。
- ・探究ナビの成果の評価方法に関心がありました。
- ・学校や大学などと連携することでこれまで以上に活動することのできる授業ができるのだと感じた。
- ・具体的な説明ばかりでしたのでとても参考になりました。どれも構築されるまでの努力と時間の大変さに驚きました。
- ・教育センター附属高等学校の話にとっても興味を持ちました。探究の授業はとても意味ある授業だと思います。
- ・3 つの事例をきき、それぞれの学校、大学が色々な取り組みをしていることを知りました。
- ・実際の内容が具体的であったため、とても参考になった。
- ・草の根的ではあるが、すでに取り組みが始められていることを強く感じた
- ・ダビンチがよく分かった。
- ・京都工織大ダビンチ入試について、どの様なことをやっているのか知りたかったので良かったです。パワポで映された内容の資料がほしいです
- ・大変参考になりました。ありがとうございました。
- ・工業高校の教員であるが、各校・各大学で行われている様々な授業・ゼミが、最終的には 1 つのものを目標(目的)にしていることに気づく内容だった。アクティブラーニングや学習のしかけは当然であるが、最終的に生徒・学生が自分に自信を持った学習、研究をすすめ、自分の将来を構築していくことにつきと思った。
- ・高崎経済大学様の事例が大変興味深く、当方でも取り入れたいと思った。

### (3) ディスカッション

- ・目的が明快ではなかった。
- ・荒井先生と荒瀬先生のやりとりが興味深く分かりやすかった。
- ・生の議論をしていただき、議論を深めていただき、たいへんわかりやすかったです。
- ・荒瀬先生のおっしゃる通り、今、教育が変わらなければいけない。デッドスパイラルを打ち切らなければいけない！テクニック論ではなくビジョンをどう描くかが大切だと思う。
- ・まだまだ達成度テストはこれからだと思います。検討をもっとしてもらいたいです。
- ・荒瀬先生と荒井先生の「生」の入試に関する議論が聞けて非常に貴重な経験をさせてもらった。
- ・もう少し意見の交換があつた方が良いのではないのでしょうか。→後半は良かった
- ・なかなか聞けない色々な立場の方の生の声が聞けたことが良かったと思います。
- ・大学入試センターと中教審との視点の違いがやり取りによって明らかになり大変勉強になりました。

- ・センターVS 中教審のやりとりが大変面白かった。椋本先生のリードがすばらしかったです。
- ・中教審 VS センターの意見やり取りは参考になりました。ありがとうございました。
- ・荒井先生と荒瀬先生のやりとりが、非常に楽しく聞くことができました。誰もが正しいと思えることはないので、一つ一つ論点を明確にした上で、議論していく必要があると再認識できました。ありがとうございました。
- ・高等学校の教育に携わっている者として、「大学」「高校」に置き換えて考えてみたとき、「入試」「授業」の内容について重く受け止めました。
- ・大変有意義なディスカッションであったと思います。今後もこの様な内容で行われることを期待しております。
- ・荒瀬先生の丁寧な説明があって、荒井先生の話がよくわかったような気がします。
- ・今まで参加したフォーラムの中で、一番興味深いディスカッションでした。時間を延長していただいたことで、また荒瀬氏の参加で非常に楽しかったです。
- ・聞きたいことがすべて聞けました。また、言いたい意見をすべて代弁して頂きました。
- ・実りの多いディスカッションだった
- ・疑問に感じていた部分が、荒瀬先生の討論参加により明確になり、有意義な時間でした。
- ・荒井先生と荒瀬先生の意見交換もあり、理解が深められたと思います。
- ・進行の妙で望外の内容を聞くことができ、有り難く存じました。
- ・もっと荒井先生のお話をお聞きしたかった。時間が短かった・残念。
- ・大変エキサイティングでした。ありがとうございました。
- ・荒井先生と荒瀬先生の議論が興味深かったです。現状のセンター試験はよく考えられた問題(専門地理です)が多く、満足していました。基礎学力を担保する分なら十分と考えていました。大学のオファーで進学先を決める方法はいいと思いました。
- ・楽しく聴かせて頂きました。〈荒×荒〉議論は緊張感があって、最近見たことのないディスカッションでした。
- ・荒瀬先生が文科省的で、荒井副所長が現場感覚に非常に近いことが印象的でした。
- ・特別講演・実践事例紹介での補足も含めてできたのでよかったです。荒瀬先生とのやり取りも良かった。
- ・入試に限定された議論だったのが不満でした。
- ・中教審をめぐる議論、興味深く聞きました。
- ・生の声をしっかり聴くことができ良かったです。
- ・実際にどのような考えで、会議が行われてきたのかが知ることができたので良かった。
- ・大変有意義な時間をありがとうございました。
- ・現場の教師の方々からの意見を聞けて大変良かった。この活動の良かった点と実際に取り組んだ時の問題点を知れて良かったです。
- ・大変勉強になりました。ありがとうございました。
- ・文科省、中教審、大学入試センター直接の考えや取り組みを聞けて現場との距離感がぐっと近づいた気がしました。
- ・中教審、センター側、お互いの思いが聴けて良かったです。とはいえ先の見通しがつかないままということには変わりありませんが。
- ・大学入試センターと中教審の考え方、どちらの意見も聞くことができ、とても勉強になりました。
- ・突然ではあったが、生の声(真剣な議論)が聞けた。立場はそれぞれだが、真剣に考えられている。
- ・多様な議論の中で、高大連携の今後のあり方、接続のあり方を再度考えさせられた。
- ・特別講演での不足分が聞けてよかったです。また、中教審、荒井先生のお話も直接聞けて少し今後の方向性が理解できました。

## (4) 分科会

### ①表現技法

- ・すばらしい経験をさせて頂きました。
- ・楽しいラベルワークを体験できました。
- ・もう少し時間がほしいと思いました。
- ・もやっともあるけど・とても参考になりました。ありがとうございます。質問に答える時間が欲しかったです。
- ・今年もありがとうございました。
- ・明日から学級日誌等で活用します。
- ・実際のワークがよかった。
- ・まだまだわからないことも多いが、ラベルワークはやってみたい取組みである。
- ・とてもよかったのですが、具体的にどんな形で授業に導入するのか見えてこず、もっと時間があればと思いました。
- ・指示内容が抽象的で少し困りました。
- ・大変面白かったです。
- ・今日の午前中の内容とどう関連づけて、授業でどう活かすのか？はい・・・悩みます。
- ・全体像が見えないまま終わった感じ
- ・応用してみます。面白かったです。
- ・よくわからぬまま参加しましたが、思っていたより(失礼)興味深い内容でした。
- ・ラベルワークはすごい効果が期待できると思いました。

### ②数学

- ・指導事例の交換とかができるといいですね。
- ・今後、さらに改善をして様々活動していくことが出来ればと思う。もっと学校同士で情報を共有できればと思う。
- ・もう少しメンバーを増やして頂くと助かります。
- ・高大連携というおと、大学の方とお話できたのが良かった。
- ・実践発表、意見交流ともに大変役立ちました。
- ・実際に現場で行われている活用事例などをたくさん聞いて、理科の先生と数学の先生との考えの違いなども知れてとても有意義な時間でした。
- ・現場の先生方と意見交換ができ、良いヒントとなりました。
- ・数学的活動について多くの方の意見、貴重なお話を聞くことが出来てとても勉強になりました。
- ・様々な意見を聞いてとても良かったです。

### ③英語

- ・どちらの報告者もすばらしく、普段の自分の授業に非常に役に立つものであった。詳しい資料が欲しかった。時間に限りがあるためか、説明のスピードがとても速いため、聴くのが大変であった。
- ・発表学校の学習レベルをさまざまな学校に発表してもらいたい
- ・報告会とても参考になりました。
- ・貴重なお話をありがとうございました。高校教員の方々のお話をうかがうのも、大変良い機会になりました。
- ・報告者の報告時間とディスカッションの時間配分をもう少し工夫しては？パワーポイント資料も配布資料があれば、報告時間を短縮することができたのではないかな？

・高大のみならず様々な角度から発信力を重視した授業の取り組みについてお話を聞くことができた。言語を学ぶ上では、日本語の力も非常に重要であることがわかり、どのようにこれから変容していくのか期待していきたい。

・興味深い内容でした。ありがとうございました！

#### ④理科

・大変参考になりました。

・実際の実験装置等も拝見でき、参考になった。自分の学校(工業高校)でも理科や工業の中で物理・化学実験を行っているが、実験と理論の両輪がかみ合う内容が一番生徒の理解がすすむことを実感している。

・分科会は高大連携を期待したが、SSHの方がもっとよくやっている。少しお粗末な実践と感じた。

・高校側、大学側、それぞれの視点、実際の事例を見せて頂き参考になりました。

・理科における高大連携はなかなか難しいと感じます。理工科系の大学の協力が欠かせないもの。

#### (5) 全体

・初めて参加しました。新しい情報を知ることが出来て大満足です。ありがとうございます。

・とても有意義なものでした。次回も是非参加してみたいと思いました。

・大変実りある時間でした。ありがとうございました。

・とても有意義でした。ありがとうございました。

・機会があればまた参加したいです。

・大変勉強になりました。ありがとうございます。

・貴重な機会をありがとうございました

・高校の先生方と話ができて良かった。熱意を感じた。高校の先生が大事に育てた子供を引き受けてさらに育てるような大学、そのための入試ができると良いと思う。

・来年も楽しみにしています。

・定年になりますが、次回も出来れば参加させていただきます。

・第8回の高大接続テストの試験と比べて、改革が大きく進んでいるように感じました。異常にエキサイトした場面がなくてよかったです。

・AMの各発表が短いと感じたが、ディスカッションで掘り下げてもらえると思う。ただ、AMのみの参加なのでディスカッションが聞けず残念である。

・今後ともよろしく願い申し上げます。

・毎年、ありがとうございます。又、来年も来ます。



## 第 12 回 高大連携教育フォーラム アンケート用紙

この度は「第 12 回高大連携教育フォーラム」にご参加いただき、誠にありがとうございます。  
お手数ですが、今後の企画実施の参考にさせていただくため、以下のアンケートにご協力ください。

### Q1. 所属・職業を教えてください

- |  |  |   |
|--|--|---|
| <input type="checkbox"/> 1. 高校教員（京都府立）   | <input type="checkbox"/> 2. 高校教員（京都市立）   | <input type="checkbox"/> 3. 高校教員（京都・私学） |
| <input type="checkbox"/> 4. 高校職員（京都府立）   | <input type="checkbox"/> 5. 高校職員（京都市立）   | <input type="checkbox"/> 6. 高校職員（京都・私学） |
| <input type="checkbox"/> 7. 高校教員（京都府外）   | <input type="checkbox"/> 8. 高校職員（京都府外）   | <input type="checkbox"/> 9. 大学教員（京都府内）  |
| <input type="checkbox"/> 10. 大学職員（京都府内）  | <input type="checkbox"/> 11. 大学教員（京都府外）  | <input type="checkbox"/> 12. 大学職員（京都府外） |
| <input type="checkbox"/> 13. その他教育機関（府内） | <input type="checkbox"/> 14. その他教育機関（府外） |   |
| <input type="checkbox"/> 15. 学生          | <input type="checkbox"/> 16. 企業          | <input type="checkbox"/> 17. その他（ ）     |

### Q2. 本フォーラムを何でお知りになりましたか（複数回答可）

- |   |  |
|---|--|
| <input type="checkbox"/> 1. 大学コンソーシアム京都のホームページを見て   | <input type="checkbox"/> 2. チラシを見て         |
| <input type="checkbox"/> 3. 過去に参加しており、直接チラシ・メールが届いた | <input type="checkbox"/> 4. 関係者から聞いた・勧められた |
| <input type="checkbox"/> 5. 所属組織からの案内               | <input type="checkbox"/> 6. 会議等での案内        |
| <input type="checkbox"/> 7. メールを見て                  |  |
| <input type="checkbox"/> 8. その他（ ）                  |  |

### Q3. 本フォーラムへの参加理由を教えてください（複数回答可）

- |  |  |  |
|--|--|--|
| <input type="checkbox"/> 1. メインテーマに興味があったから              |  |  |
| <input type="checkbox"/> 2. 第 1 部特別講演のテーマ・登壇者に興味があったから   |  |  |
| <input type="checkbox"/> 3. 第 1 部実践事例紹介のテーマ・登壇者に興味があったから |  |  |
| <input type="checkbox"/> 4. 第 1 部ディスカッションに興味があったから       |  |  |
| <input type="checkbox"/> 5. 第 2 部分科会のテーマ・登壇者に興味があったから    |  |  |
| <input type="checkbox"/> 6. 過去に本フォーラムに参加した経験から           | <input type="checkbox"/> 7. 高大連携活動の情報を収集するため |  |
| <input type="checkbox"/> 8. 京都に寄る機会があった                  | <input type="checkbox"/> 9. 所属団体からの推薦        | <input type="checkbox"/> 10. 所属団体からの強制 |
| <input type="checkbox"/> 11. その他（ ）                      |  |  |

### Q4. 本フォーラムの開催通知がある場合、どの手段で連絡してほしいと思いますか。（複数回答可）

- |   |                                    |                                       |                                      |
|---|------------------------------------|---------------------------------------|--------------------------------------|
| <input type="checkbox"/> 1. E-mail での案内 | <input type="checkbox"/> 2. チラシの郵送 | <input type="checkbox"/> 3. 所属団体からの通知 | <input type="checkbox"/> 4. WEB での広報 |
|---|------------------------------------|---------------------------------------|--------------------------------------|

### Q5. 本フォーラムの開催時期については、何月の開催をご希望ですか（複数回答可）

- |                              |                              |                              |                               |                               |                               |                                |
|------------------------------|------------------------------|------------------------------|-------------------------------|-------------------------------|-------------------------------|--------------------------------|
| <input type="checkbox"/> 1 月 | <input type="checkbox"/> 2 月 | <input type="checkbox"/> 3 月 | <input type="checkbox"/> 4 月  | <input type="checkbox"/> 5 月  | <input type="checkbox"/> 6 月  |                                |
| <input type="checkbox"/> 7 月 | <input type="checkbox"/> 8 月 | <input type="checkbox"/> 9 月 | <input type="checkbox"/> 10 月 | <input type="checkbox"/> 11 月 | <input type="checkbox"/> 12 月 | <input type="checkbox"/> 何月でも可 |

理由・意見

### Q6. 本フォーラムの開催については、何曜日の開催をご希望ですか（複数回答可）

- |                                |                                |                                |                                |                                |                                |                                |                                |
|--------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|
| <input type="checkbox"/> 1. 月曜 | <input type="checkbox"/> 2. 火曜 | <input type="checkbox"/> 3. 水曜 | <input type="checkbox"/> 4. 木曜 | <input type="checkbox"/> 5. 金曜 | <input type="checkbox"/> 6. 土曜 | <input type="checkbox"/> 7. 日曜 | <input type="checkbox"/> 何曜でも可 |
|--------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|

理由・意見

### Q7. 次回の本フォーラムにも参加したいと思いますか

- |  |   |                                       |
|--|---|---------------------------------------|
| <input type="checkbox"/> 1. 予定が合えば参加する | <input type="checkbox"/> 2. 興味のある内容なら参加する | <input type="checkbox"/> 3. 参加しない・その他 |
|--|---|---------------------------------------|

理由・意見

### Q8. 次回の本フォーラムで「取り上げてほしいテーマ」や「報告者として招いてほしい人物」があればお教えてください。

--

Q9. 「特別講演」のご感想をお聞かせください。また、今後希望するテーマがあればご記入ください。

特別講演	<input type="checkbox"/> 参加		・		<input type="checkbox"/> 不参加	
満足度	<input type="checkbox"/> 大満足	<input type="checkbox"/> 満足	<input type="checkbox"/> やや不満	<input type="checkbox"/> 不満	開催時間	<input type="checkbox"/> 長い <input type="checkbox"/> 適切 <input type="checkbox"/> 短い
定員	<input type="checkbox"/> 多い	<input type="checkbox"/> 適切	<input type="checkbox"/> 少ない		会場規模	<input type="checkbox"/> 大きい <input type="checkbox"/> 適切 <input type="checkbox"/> 小さい
ご意見・ご感想						
希望する内容・テーマ						

Q10. 「実践事例紹介」のご感想をお聞かせください。また、今後希望するテーマがあればご記入ください。

実践事例紹介	<input type="checkbox"/> 参加		・		<input type="checkbox"/> 不参加	
満足度	<input type="checkbox"/> 大満足	<input type="checkbox"/> 満足	<input type="checkbox"/> やや不満	<input type="checkbox"/> 不満	開催時間	<input type="checkbox"/> 長い <input type="checkbox"/> 適切 <input type="checkbox"/> 短い
定員	<input type="checkbox"/> 多い	<input type="checkbox"/> 適切	<input type="checkbox"/> 少ない		会場規模	<input type="checkbox"/> 大きい <input type="checkbox"/> 適切 <input type="checkbox"/> 小さい
ご意見・ご感想、希望する内容・テーマなど						

Q11. 「ディスカッション」のご感想をお聞かせください。

ディスカッション	<input type="checkbox"/> 参加		・		<input type="checkbox"/> 不参加	
満足度	<input type="checkbox"/> 大満足	<input type="checkbox"/> 満足	<input type="checkbox"/> やや不満	<input type="checkbox"/> 不満	開催時間	<input type="checkbox"/> 長い <input type="checkbox"/> 適切 <input type="checkbox"/> 短い
定員	<input type="checkbox"/> 多い	<input type="checkbox"/> 適切	<input type="checkbox"/> 少ない		会場規模	<input type="checkbox"/> 大きい <input type="checkbox"/> 適切 <input type="checkbox"/> 小さい
ご意見・ご感想						

Q12. 「分科会」のご感想、お聞かせください。また、今後希望するテーマがあればご記入ください。

参加分科会	<input type="checkbox"/> 表現技法・ <input type="checkbox"/> 数学・ <input type="checkbox"/> 英語・ <input type="checkbox"/> 理科		に参加		・ <input type="checkbox"/> 不参加	
満足度	<input type="checkbox"/> 大満足	<input type="checkbox"/> 満足	<input type="checkbox"/> やや不満	<input type="checkbox"/> 不満	開催時間	<input type="checkbox"/> 長い <input type="checkbox"/> 適切 <input type="checkbox"/> 短い
定員	<input type="checkbox"/> 多い	<input type="checkbox"/> 適切	<input type="checkbox"/> 少ない		会場規模	<input type="checkbox"/> 大きい <input type="checkbox"/> 適切 <input type="checkbox"/> 小さい
ご意見・ご感想、希望する内容・テーマなど						

Q13. その他、本フォーラムに対するご感想・ご希望などあればご記入ください。

--

ご協力ありがとうございました。次回のご参加を心よりお待ちしております。

## < 2014年度 > 京都高大連携研究協議会 役員・委員一覧

### ▶ 役員会

< 会長 >	<b>赤松 徹眞</b>	大学コンソーシアム京都 理事長 龍谷大学 学長	<b>中村 則和</b>	京都市立高等学校長会 会長 京都市立銅駝美術工芸高等学校 校長
< 副会長 >	<b>小田垣 勉</b>	京都府教育委員会 教育長	<b>佐々井宏平</b>	京都府私立中学高等学校連合会 副会長 京都学園中学高等学校 校長
< 副会長 >	<b>生田 義久</b>	京都市教育委員会 教育長	<b>鈴鹿 且久</b>	京都商工会議所 常議員 株式会社聖護院八ツ橋總本店 代表取締役社長
	<b>山本 綱義</b>	京都府私立中学高等学校連合会 会長 京都精華女子中学校・高等学校 校長	<b>安本 義正</b>	京都文教短期大学 学長
	<b>須原 洋次</b>	京都府立高等学校長会 会長 京都府立北嵯峨高等学校 校長		

### ▶ 運営委員会

< 委員長 >	<b>北村 聡</b>	京都府私立中学高等学校連合会 理事 京都外大西高等学校 校長	<b>木村 良己</b>	京都府私立中学高等学校連合会 理事 同志社中学校・高等学校 校長
	<b>山埜 茂彦</b>	京都府教育庁 指導部 高校教育課 首席総括指導主事	<b>松川 節</b>	大谷大学 副学長／大学コンソーシアム京都 高大連携・インターンシップ事業部長
	<b>森本 義則</b>	京都府教育庁 指導部 高校教育課 指導主事	<b>徳永 寿老</b>	大学コンソーシアム京都 事務局長
	<b>川浪 重治</b>	京都市教育委員会 指導部 学校指導課 首席指導主事	<b>國枝 義隆</b>	高大連携教育プログラム検討部会 部会長
	<b>小林 富雄</b>	高等学校コンソーシアム京都 事務局長	<b>古賀 潤</b>	高大情報発信交流検討部会 部会長

### ▶ 高大連携教育プログラム検討部会(教務部会)

< 部会長 >	<b>國枝 義隆</b>	京都市立西京高等学校 教務主任	<b>花房 克生</b>	京都外大西高等学校 教務主任
	<b>松井佳代美</b>	京都府立鳥羽高等学校 教務部長	<b>徳永 秀也</b>	同志社中学校・高等学校 教務主任
	<b>野口 愛子</b>	京都府立宮津高等学校 教務部長	<b>椋本 洋</b>	立命館大学 理工学部 講師
	<b>村田 昌彦</b>	京都市立日吉ヶ丘高等学校 教務主任	<b>内村 浩</b>	京都工芸繊維大学 アドミッションセンター 教授

### ▶ 高大情報発信交流検討部会(進路部会)

< 部会長 >	<b>古賀 潤</b>	京都府立南陽高等学校 進路指導部長	<b>柴田 昌平</b>	東山中学・高等学校 進路指導部長
	<b>坂根 賢</b>	京都府立加悦谷高等学校 進路指導部長	<b>萩野 達也</b>	京都商工会議所 総務部 次長
	<b>谷内 秀一</b>	京都市立堀川高等学校 副校長	<b>中村 博幸</b>	京都文教大学 臨床心理学部 教授
	<b>家宇治 望</b>	京都市立日吉ヶ丘高等学校 進路指導主事	<b>筒井 洋一</b>	京都精華大学 人文学部 教授
	<b>北川 浩司</b>	同志社国際中学校・高等学校 教務主任	<b>山本以和子</b>	京都工芸繊維大学 アドミッションセンター 准教授

### ▶ 高大連携推進室

< 室長 >	<b>内村 浩</b>	京都工芸繊維大学 アドミッションセンター 教授	< コーディネーター >	<b>荒瀬 克己</b>	大谷大学 文学部 教授
< アドバイザー >	<b>椋本 洋</b>	立命館大学 理工学部 講師		<b>筒井 洋一</b>	京都精華大学 人文学部 教授
				<b>中村 博幸</b>	京都文教大学 臨床心理学部 教授
				<b>山本以和子</b>	京都工芸繊維大学 アドミッションセンター 准教授



**京都高大連携研究協議会 事務局**

公益財団法人 大学コンソーシアム京都  
高大連携・インターンシップ事業部

**T E L** 075-353-9153

**E-mail** [kodai@consortium.or.jp](mailto:kodai@consortium.or.jp)

